リリス　-戒-

氷魚出都奴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリス　―戒―

【Ｎコード】
Ｎ１１６８ＢＡ

【作者名】
氷魚出都奴

【あらすじ】
この世界には全ての災いの元とされる存在があった。
それはリリスと呼ばれる少女。
何百年と昔から人類の敵とされ、発見され次第処刑され続けてきた。
そう、現在も継続されている。
リリスは処刑されても時を経て、この世に同じ姿で蘇る。
蘇れば見つかり、見つかれば捕まえられ、捕まえられれば処刑される。
そして、また、この世に蘇る。

この悪循環が永きに続く世界で、勇者と呼ばれる人物がいた。
名はレディン・クレイオ。
人類を脅かす魔族を打ち破り、弱きを助ける英雄。
だが、彼は知りえてしまった。
リリスの本当の姿を。
そして、勇者は反逆者の烙印を押されながらもリリスを護る。
これは過去にあった、リリスに拘る一つの物語。

The Fugitive（前書き）

これは昔「夢鑑堂」というＨＰで掲載した物を、多少の誤字脱字修正したものであり、内容は掲載当時のままです。

The Fugitive

朝日がその姿を現すには早すぎる時刻。
山間の森林を、紅い松明の灯りが幾つか駆ける。
それを持つ者達は、草木を掻き分け獲物を躍起になって追いかける。
現在この山では、山狩りが行われいる。
実行者はこの山を含め二つ山向こうに村を構える者共だ。
追っている獲物は数日前より村の付近で何度か目撃されており、
今日ついにその姿を捕捉した。
宵の口より始まった山狩りだが、長時間休憩もろくに取らずに獲物を追い掛け回している為、山歩きになれた彼らといえど疲労は頂点に達しようとしていた。
始めは２０名を越える大所帯だったが、一人また一人と村に帰ってゆき、
今残っているのは４人だけとなっていた。
交わされる会話はなく、息も切れ切れな呼吸音だけがあたりを支配する。
獣じみた瞳が漆黒の闇に獲物が飲み込まれないように見開かれていた。
その距離わずかに１０ｍ・・・獲物を捕縛するのはもはや時間の問題であった。
松明を握る手がにわかに沸いた緊張感から汗ばんでくる。
山狩りの基本は大人数で獲物を囲むように包囲し捕縛する。
だが、４人という人数ではそれも不可能である為、獲物が弱るまで執拗に追い立てるのである。
相手に休む暇を与えず、常に緊張という精神的抑圧をうながし、心身ともに消耗させる。
始めは走り回っていた獲物も徐々にその速度は落ち、いまでは普通に歩いている程度だった。

だが、ここで機を焦って一気に飛びかかろうなどとは考えてはいけない。
それは４人ともわかりきっていることだった。
窮鼠猫を噛む。
この諺に喩えられる様に追い詰められた獲物は最後の全力を振り絞って抵抗する。
その抵抗は凄まじく怪我人を出さないわけにはいかない。
それは彼等ほど山に慣れた者達ならば身に染みていることだった。
一番安全なのは相手が最後の抵抗をする力も気力も失う時なのだ。
逸る気持ちを殺し、相手の消耗加減を様子見、徐々に距離を詰めてゆく。
獲物までの距離はあと５ｍ。
すでにその歩みは無いに等しい。
一歩、また一歩と疲労により鈍重になった足を一本づつ気力を振り絞りながら進む。
何度となく自重すら支えきれなくなって倒れ込み、そのたびに力なく立ち上がる。
獲物にはもはや前に進むことしか頭には入っていなかった。
少しでも速く、少しでも遠くに離れることだけを考え、あとは前に進むことに全力を注いでいるからである。
そんな獲物の様子を見ていた四人はこの機を逃す事は無い。
と、お互い目で合図を送ると獲物に全速力で襲い掛かった。
その瞬間、獲物を見据えていた瞳がゆらりと浮き出す影を映した。
月明かりを背に受けるその姿はまさに影そのものだった。
彼らは何事かと獲物から一瞬だけ意識がそれてしまった。
何かが月光を煌かせ一閃した。
それが白刃だと理解したときには４つの首が胴体から離れ宙に舞っていた。
事切れたことすらわからぬかのように体は二歩三歩と前に歩み出で、糸の切れたように倒れた。

影は剣を一振りし、微かについた血糊を飛ばして柄に収めた。
振り返ると獲物として追われていた者が限界を超えた疲労の為に意識を失って倒れていた。
元は白かった服は土やら何やらで薄汚れており、至る所に鉤裂きができていた。
そこから剥き出しの白い肌は木々の間を走り抜けるたびに引掻いたのか蚯蚓腫れをおこし、
出血している個所も少なくはない。
今はくすんだ茶色の長い髪も一度洗い上げればとても綺麗なものになりそうだった。
影は躊躇いも無く近づくと優しく抱き上げた。
まだ顔に幼さを残した少女は整った眉を顰めさせ息も絶え絶えにその緩やかな胸を上下させる。
呼吸は苦しそうだが、別段大怪我を負っているわけでもなく、ゆっくりと養生すれば元気になるだろう。
影は優しく少女の顔を見守りながらそのまま山を降りていった。
朝日が木々の間から木漏れ日となって顔に降り注ぐと少女は優しい眩しさにゆっくりと瞳を開く。
寝起きの気だるさを心地よく感じながら身体を起そうとしたとき、全身に小さな痛みが走った。
その痛みで自分の置かれた立場を瞬時に思い出し、辺りを見渡す。
辺りには動くものは無く朝のひんやりした空気が漂うだけであった。
その冷気に少し震えを憶え、今まで自分が毛布に包まっていたことに気がついた。
見れば昨日ついた引掻き傷などが治療され包帯まで巻かれているではないか。
どう考えてみても昨日の状況からは今の状態に到底結びつかない。
自分は追われてから倒れて意識を失う所までしか記憶が無い。
追われる身となってから数百年。
寝込みを襲われる事はあっても介抱されることなんて今まで一度も

無かった。
一体誰が、何が目的で・・・少女の頭の中ではそんな考えがぐるぐると回っていた。
見た目１５、６歳のこの少女は世界中の人々にリリスと呼ばれている。
本名は誰も知らない。
知る必要も無い。
見つけ次第抹殺されるのだから。

Revelation of god

彼女はおよそ４百年前、人々の前に現れた光の神から『この世の全ての災いの源』だと告げられた。
光の神は彼女をリリスと呼び、彼女を滅する事が出きれば、全ての災いは無くなるだろうと続けた。
この頃は世界中で疫病が猛威を古い、更に異常気象の為に飢饉もしばしば起こっていた。
皆が皆信じたわけではなかった。
年端も行かぬ少女を殺せば災いが無くなるなどと。
しかし、自分達の信じる神が告げたことが間違っているとも思えない。
そして一部の信心深い人々が強行で少女を処刑することに踏み切った。
その日のうちの彼女の処刑は終了した。
せめて一思いに、と斬首刑が選ばれた。
すると、どうだろう。
その年は飢饉も疫病も無く平和な日々がつづいたのだった。
しかし翌年、再び世界に飢饉や疫病が再び猛威を振るい始めた。
やはり一人の少女を生贄にしたぐらいでは災いなど無くなるはずが無い。
人々は1年前に情け無用に処刑された一人の少女に申し訳無いと思い始めていた。
だが、ある日その少女が村に帰ってきたのだ。
確かに一年前処刑された少女だった。
村人達は戦慄した。
確かに処刑は行われ、墓まで用意して埋葬したのだ。
だが、こうして目の前に少女はいる。
人々は理由がわからなかった。

彼女の知識は確かに生前の彼女のものだった。
疑うこと無き本人だったのだ。
彼女についての査問会議は徹夜で行われた。
少女は気がついたらこの村の付近にいたのだといいはるばかり。
埒があかなくなり時間も無駄に周り始めようとした時、一人の青年がつぶやきを漏らした。
少女は魔女なんじゃないかと。
その一言が人々を虜にした。
それならば納得がいく。
魔女ならば怪しい秘術で不死身にもなるだろう。
そして少女が魔女ならば帰ってきた目的は一つ。
自分を殺した村人達に復讐するためしかない。
こんどは神様は関係がない、村一致で処刑は実行される。
理解不能な出来事に猜疑心が後押し、その狂宴は再び行われた。
今度は村人を守るため、世界の災いを無くすための正義の行為として。
魔女だと判断された少女は生きたまま焼き殺された。
やはりその年は飢饉も疫病も流行らず平和な日々がつづく。
しかし、今度は４年が過ぎた頃。
三度災いはおとずれた。
世界中で疫病が猛威を奮い、抵抗力の無い老人や子供はすぐさま死んで行く。
４年前の比ではないそれは人々にひどく絶望を抱かせた。
その噂は風の便りで運ばれてきた。
少女を処刑した村の青年が出稼ぎ先の隣町で少女を見たという。
それから暫らくして少女は三度めの処刑を受けるのだった。
気がつくと生き返っており、見つけられると殺される。
繰り返される凶事は次第に地域を広げてゆき数百年たった今では世界中で追われている。
もはや深い意味を知り少女を殺す者はいない。

農業、薬学、医学・・・文化水準が発達した現在では、数百年前にいわれた災いなどすでに滅している。
リリスを追う者達は罪に為らない罪を犯す愉しみに浸りたいが為に追いたてる。
およそ人の生活では経験できない「やってみたいができないこと」が出きるのだ。
世界中の人々が、神が、認めてしまった存在してはならないモノ。
暴行、殺人、虐待、およそ人間の理性が禁忌とするものがリリスになら許される。
それどころか仕留めた者は半ば英雄扱いであった。
この甘露を求めて世界中のどこか壊れた者達はリリスを追いたてる。
ただ己が欲望のはけ口のために。
そんな気が狂いそうな生活が数百年続いている。
もう、何百死んだろう。
もう、何百蘇っただろう。
もう、何千許しを乞うたろう。
もう、何万泣き叫んだだろう。
だが、現実は変わらない今日も追いかけられる。
つかまれば乱暴され殺される。
幾度となく蘇るとはいえ、死ぬことの痛みや恐怖まで無いわけではない。
だがしかし、気が狂うことも、ましてや安らかに死ぬことも出来ない。
ただ、出来るだけ殺されないように身を隠しながら生き延びるだけだ。
そんな自分が今は不思議な状況に陥っている。
こんな身の上の自分を追手から逃がし、傷の手当てをし、毛布をかけてくれる。
とても信じることが出来なかった。
だがしかし、数百年ぶりに胸に込み上げる人の温かみに嗚咽が止ま

らない。
暫しの間、少女は毛布に顔を埋め涙を流していた。

Boondock Saints Dohagga

後にリリスの判別手段となる手配書を作成可能とした一つの出来事をここで上げよう。
リリスという存在が神の掲示によって世に知らしめられてから、およそ１００年ほどすぎた頃。
ある国の処刑人ドハッガーは法律という裁きの名のもとに、命令されるがままに多くの人間を処刑してきた。
それが彼の仕事であり生活基盤であったからだ。
彼は罪人の首を大斧で切り落とす斬首刑の役人だ。
ここ数年、似たような容姿の少女達が集められると、まとめて公開斬首刑にしてきた。
リリスを探すのには口頭で広がった容姿の特徴だけが頼りなのである。
この国では怪しきは全て罰せよとしている。
その為どこか一部でも似ているなら処刑する事に決められていた。
反発は即死罪。
徹底した決まり事であった。
その日も彼は少女達の怨念を断ち切るように斧を振り下ろしていた。
だが、一人の少女を見たとき、彼に緊張が走った。
確かに自分は一度この娘を殺している。
それは直感的なものだった。
確たる証拠も記憶も無い。
ただそう思えるだけであった。
彼は何百もの同じような顔の少女を処刑してきた。
どの娘も泣き叫び許しを願ってきた。
それがたまたま罪悪感とともにこの奇妙な感覚になっただけだ。
そう自分を誤魔化しいつものように少女の首を切り落とした。
その日にその感が取れることは無かったが、日を追うごとに徐々に

薄れていった。
そして二年たったある日。
いつものように斬首台に、数人の少女達が連れてこられた。
何気なく少女達を見たときドハッガーは凍りついた。
と同時に脂汗がだらだらと体中から噴き上げて来た。
そこに三度目になるだろう少女の姿を確認したのだ。
二年かけて薄らいだあの奇妙な感覚が鎌首を擡げて自分の中で大きくなってゆく。
それは体中の器官に命令を出す・・・とても危険なのだと。
そしてその感覚が頂点に達したとき、ドハッガーは頭の中が真っ白になった。
次に気が付いたときには手にもった斬首用の斧で一人の少女をずたずたに切り裂いていた。
無意識に体を支配した、その奇妙な感覚とは恐怖という名の本能だった。
かくしてドハッガーより事情を聞いた国の宰相たちは、すぐさまその娘の顔を似顔絵にし、世界中に配ったのだった。
こうしてリリスの存在は確定し、世界中で誤認されて殺される少女は皆無となっていった。
蛇足であるが、ドハッガーはこの日を堺に処刑人を辞職している。
以来、毎日教会で祈りをささげていたという。
自分に与えられた運命を呪っているのか、それとも懺悔しているのかそれは誰にもわからなかったという。

He is called 'BRAVE'

「レディンさん、おはよう！」
「おはようございます勇者様。」
「クレイオ様、おはようございますぅ！」
「よう！いい朝だなレディン！！」
朝の大通りは賑やかだった。
見知った人が顔をあわせるたび、にこやかに声を掛けてくれる。
「みんなおはよう。今日もいい天気だな。」
レディンもにこやかに挨拶を返す。
「今日はどこに出かけるんだい？」
店の前を通りかかったとき、パン屋のおばさんが焼き立てのパンを放り投げながら聞いてきた。
「っと、ありがとう！今日から1週間ほどバルディオス山脈に遠征なんだ。」
「えぇ！？じゃあもしかして火吹竜の所か？」
パン屋の横の靴屋の親父さんがビックリした声を上げる。
「ああ、中々の大物らしいんで早く退治しないと。皆困ってるしね。」
にっこり微笑んで言うレディン。
「そんな危険な怪物相手に一人で行くきかい！？」
「今回はちゃんと仲間と行くよ。信頼できる頼もしいのがね。あいつらがいれば大丈夫。」
レディンは力強く言った。
その言葉は自信に満ち溢れ、聞くものを納得させる。
「いやぁ！ウチの勇者様は頼もしいねェ！！」
「ホントだな。おかげでゆっくり話しも出来やしねェよ！」
ちくしょーっと悔しがる親父さんを、無理言うもんじゃないよ！とおばさんが叱る。

「ははは。有難うございます。そう言ってもらうと嬉しいよ。それじゃ。」
レディンはそう言うと軽く手を振ると歩いていった。
「イイやつだよなぁ！」
「本当に。私たち自慢の、いや街上げての大出世人だよ！！」
二人は誇らしげに語り合うのだった。
レディンの噂は急速に広まりつつあった。
１３歳という若さで、世に名を馳せる騎士国家バイトンの騎士隊に名を連ねた。
が、１７歳になると突然騎士隊を除隊、その後フリーの傭兵へと転向した。
以来、傭兵ギルドに所属することになる。
しかし、レディンが望んで請け負う仕事は報奨金が少ない割に危険な物ばかりであった。
ギルドに依頼してくる人は様々だが、中には貧しい人々の悲痛な訴えもある。
現在この世界には魔族が闊歩している。
幸い軍団として成り立っている数は少なく、各国の軍事力で抑えることは可能だった。
しかし、軍団とは別に個別で人々を襲う魔族の方が圧倒的に数が多い。
中規模な町ならば自警団や隣国の騎士団などで迎撃する事も出来るだろう。
しかし、点在する小さな村ではそれも無理だった。
残された道は少なく、近隣国からの助けを待つか、高い報奨金をだしてギルドから傭兵を派遣してもらうか、なすすべも無く魔族に蹂躙されるのを黙ってみているかである。
レディンはそんな人々の依頼を率先して請け負い、圧倒的な強さと早さで解決する。
時には無償でギルド以外の個別依頼も受けている。

貧しい人々の前に颯爽と現れ悪を打つ。
何時しか彼等はレディンの事を勇者と呼ぶようになっていた。

レディンは街のはずれにある一軒の小屋に脚を運んだ。
「クロノスいるか？」
木製のドアをノックするが返事はない。
「おかしいな出かけてるのか？約束の時間に来たって言うのに・・・」
そういってドアを開けた瞬間何物かが切りかかってきた。
しかし、レディンは焦ることなく剣をすばやく抜いて剣戟を受け止める。
「ったく、可愛げのないやつ。少しは慌てるとか、ビックリするとかないのか？」
「これから出かけるんだ、冗談事してないで早く支度をしてくれ。」
「はいはい。あいかわらず面白くないヤツだなぁ。久々のご対面だって言うのに。」
うんざり顔のクロノス。
「そうか・・・あれから一年になるんだな。」
「ああ、お前が調子に乗って西大陸の魔族討伐になんか行くからだ。」
「まあ、良いじゃないか生きて帰ってきたんだから。」
「これが戦場では魔族にまで恐れられた『青き閃光』」かよ。」
呆れ顔のクロノス。
「そんなの勝手に皆が呼んでるだけだよ。俺よりすごい人は沢山いたよ。
青竜騎団のナインブレード様なんか名前の通り九つの刃で攻撃してるようだったんだ！」
レディンはそのときの興奮を思い出したのか拳に力が入る。
「ま、積もる話しは旅の道中で聞くよ。」
「・・・そうだな。長旅になるだろうし、早く行かないと困ってる

人達が可愛そうだ。」
「今度のヤツはバルディオスの・・・ドラゴンだよな？」
一筋の汗がクロノスの額をつたう。
「ああ、体長５ｍほどの小物だけどな。火を吹くんでやっかいなんだ。」
「小物でもドラゴンだぜ？！出来れば相手にしたくねぇな。」
「じゃあ、残れば良い。」
「そうは言ってないだろ。ったく、相変わらずいぢわるな奴だよな。」
「ふふふ。」
「もう、支度は出来てるさ。じゃいこうぜ！ってもう居ねぇ！？」
レディンは背を向けてすたすたと歩き始めていた。
「待てってばおい！ったくしょうがねぇ自分勝手なヤツだな。」
クロノスはそうボヤキながらも嬉しそうにレディンの後を追いかけて行くのだった。

The night before the festival

夕日に空が紅く染め上げられる頃。
さらに赤く染め上げられた空間があった。
噴出される轟炎に、飛び散り滴り落ちる血の色に赤く赤く染まりゆく。
丸太のように立派な四肢は骨まで達する斬撃を受け続け、もはや自重を支えきれず、惨めに地に伏せることしか許されなかった。
２mを超える長身で筋肉質の男が獲物の首筋に己の身長より長く、幼子なら隠れてしまうような巨大な鉄槌を打ちつける。
あまりの重圧に耐え切れない皮膚は鉄槌の形に凹み、
すかさず噴水のようにおびただしい紅い体液が噴出する。
びりびりと肌に感じるほどの獲物の咆哮は麓の村まで聞こえたのではなかろうか。
腹の底に響く重々しく、生理的嫌悪感を抱く震声は、自分の命を奪おうとする者への呪言の様に思わされる。
その叫びも終わらぬうちに獲物の頭蓋を研ぎ澄まされた一撃で打ちぬく。
二度目の咆哮は長く弱弱しく、最後には途切れてしまった。
レディンとクロノス、そして麓の村で合流したゼスとハウデスの四人はついに火竜を倒した。
服や鎧のあちこちは焼け焦げ、細かな傷や打身などはあるものの四人とも五体満足であった。
レディンは断末魔の主である体長６mの火竜の二本在る角を切り落とし、そこで一つ安堵の息を吐いた。
驚異的な竜の生命力は侮れない、倒したと勘違いして油断すると致命的な反撃を受けることもある。
本当に絶命したか確認してからでないと気を抜くことは命取りに為る。

切り落とした角は退治した証しとして持ちかえる。
また、竜の角は貴重な資源として有効活用出来る。
粉末にしたものを漢方薬と混ぜて飲めば強壮薬に、魔導師の実験材料に、聖者の儀式に用途は様様だった。
角の長さは５０ｃｍほどで直径は５ｃｍはある。
これを二本専門店に売りさばけば一ヶ月は遊んで暮らせるだろう。
もっとも依頼中の儲けは仲間と等分するため、装備一式の支度に打ち上げの酒場の飲み代やほとんど失われるだろう。
その作業を見ていたクロノスはつい先ほどの戦闘も何のその、元気よく先頭をきって麓の村へ続く山道を降り始めた。
そんなクロノスを微笑みながら残る３名も後に続いた。
麓の村ではすでに村を上げての祭りの準備であわただしかった。
四人は早速村長に報告しに行くとやはり火竜の断末魔がここまで聞こえており、すぐさま祭りの手配をしたのだった。
そして礼を兼ねて祭りにも是非参加して欲しいと願い出られた。
断る理由も無い四人は快く承諾した。
祭りは翌日の正午に始まるとのことなので長老の用意した部屋で各自休養についた。
その深夜。
レディンはふと外の騒がしさに目を覚ました。
騒がしいといっても長老の館自体がかなり物静かな為、話し声だけでも注意すると聞こえてくる。
別に隠れて聞き耳を立てる趣味は無い。
もし困り事なら力になろう、そんな軽い気持ちでドアを開け長老の元へむかった。
長老の元には村の男数名が集まっていた。
男達はしきりに長老に訴えていた。
声を掛けて話を一緒に聞いてみると、今日の夕方森の辺りでリリスを見たという。
リリスの存在が世界中に知れ渡って数百年。

昔はごく一部の地域でしか目撃されなかったリリスも数百年もかけ世界中を移動していたためにその知名度もあがっていた。
手配書は一定時期に描きなおされたものが世界中に再配布されており、初めてみる者でも発見することはたやすかった。
長老は祭りの後にでも山狩りをするということで村人達を帰らせた。
長老はリリスに対して特に危機感を持っているようには見えなかった。
またレディンも大して気にとめなかった。
だいたい、神を嫌うわけではないが、見たことも無いものに信仰し、命をささげるなど馬鹿らしい。
信じられるのはこの世界で生きている自分達の力であるという信念があるからだった。
だが、このリリスというマツリゴトには不愉快の念を隠し切れなかった。
否定論者ではなく、無関心なだけである為たいした衝突も無くすごしてきたが今回はそうはいかなかった。
そもそも神の掲示したという災いとは何か、疫病、飢饉、戦争・・・すべて人間が生活していれば起こりうる事象である。
それをひとつの存在があるためだなど、到底納得できるわけがない。
レディンには人の意見に流されない確固たる自分の納得できる理由がなければただの戯言にしか思えなかったのだ。
自分の目で見、触り、体験してこそ初めて自分の中で知識として確定されてゆくのである。
レディンは少し熱く考えている自分に冷静になり、眠りついた。

Suspicious

目が覚めると何やら外の喧騒がかすかに聞こえてくる。
きっと祭りの準備の追いこみに入っているのだろう。
レディンはベッドの上で覚醒したまま、何をするわけでもなく目を閉じていた。
ふとリリスの話しが頭に浮んできたからである。
昨晩この村付近で目撃されたリリス。
手配書を見る限り、普通の少女であった。
突如現れた神に、災いの根源と掲示された当時、一体何があったのだろうか。
数百年たった今残されている文献と代代受け継がれる口伝の情報は、どれも通達途中で尾鰭の付いた信憑性にかけるものだと思われる。
ただ、いくつか確実に共通するものがあった。
掲示を残した神は光の神で唯一度だけ出現したとされる。
リリスは其の存在自体が災いを呼ぶ根源であると。
そして、幾度と消滅、それこそ骨まで焼き尽くしても、しばらくの後必ずこの世界のどこかに蘇ってくる。
神は何ゆえこの少女にこのような過酷な運命を与えたのか。
運命は自分の力で運ぶ命だと常々言い聞かせてきたレディンだが、リリスに関しては他人に運ばれる命と称しても過言ではない。
この少女は自分で人生を選ぶ権利を剥奪され、生きる事も死ぬ事も他人任せなのだ。
人間達は未知なる恐怖から逃れ、安心を得るために安易な行動に出たのだ。
自分がよければ犠牲を厭わない。
禁忌とされる事さえも平然と破り継続させる。
何と理不尽で。
何と傲慢で。

何と無様な。
今まで自分が命と生涯をかけて守ろうとしている人間という生物がこれほどまで愚かで滑稽だとは。
レディンの中で初めて人間に対して嫌悪感が産まれた瞬間であった。
「今日の勇者様はなんて顔してんだ・・・？」
そう語り掛けられたレディンはゆっくりと瞼開き、声の聞こえた扉付近に目線を送る。
「クロノスか・・・・・・おはよう・・・・」
何の感情も無く命令された機械のように言葉を吐き出す。
「まったく・・・昨日は眠れなったのか？酷い顔してるぜ？」
怪訝な表情を隠しもしないクロノスは声の調子を落とし真面目に質問する。
「そうなのか・・・？しばらくすれば大丈夫さ。」
レディンに特に変わりは無い。
ただレディンの中に先ほど産まれた感情はしこりの様に消えることは無かった。
「ん。まあまだ祭りの開始まで時間が有ることだし、顔でも洗って飯でも食えば元気も出るだろ。」
完全に納得したわけではないが、本人が言うのなら仕方が無いといった様子でクロノスが言う。
「ああ、そうだな。そうするとしよう。」
そう言うとレディンはベッドから降り立ち身支度を整えた。
二人そろって食堂まで出向くとそこにはすでにゼスとハウデスが席についていた。
すでに二人とも朝食は済ませたようで飲み物を啜って寛いでいた。
席につくと屋敷の使用人が二人分の食事を運んできた。
しばらく無言で食事を摂っているとハウデスが口を開いた。
「わたしたちはー、このあとー、すぐにー、しゅっぱつしますー」
にこやかに微笑みながらひどくおっとりした口調でハウデスが言う。
「・・・・・・」

無言でうなづくゼス。
「・・・そうか。次ぎはどこに行くんだ？」
出会いと別れは何時もの事。
彼らのような傭兵は仕事をするのが生活のようなものだ。
仕事の終わりが次ぎの仕事の始まりなのだ。
「つぎはですねー、このバルディオスからー、しばらく東向こうのー、ボルテス渓谷にー、行くんですー」
ボルテス渓谷とは大小五つの渓谷が連続して蛇のように横たわる場所で鉱脈が多いことで有名だ。
「・・・・・・」
無言でうなづくゼス。
「ボルテスって言やあ、小鬼賊の事件かぁ？」
日ごろ情報収集が趣味だと公言しているクロノスが顔を顰めて言う。
「そうなんですー。最近すみついたらしくー、鉱脈に悪さをするのでー、困ってるそうなんですー」
「しかし、小鬼程度なら自警団程度で追い払えるんじゃないのか？」
小鬼とは大きくても体長１ｍほどで身のこなしが素早く、肉食のためよく家畜などを襲って迷惑をかける魔属である。
しかし、４、５匹程度で群れなければ人前に姿を現すことも無いほど臆病者で力も成人男性程度である。
「小鬼賊っていっただろう？しかもかなり大きいらしいぞ？」
「ああ、そういうことか。」
小鬼賊とは小鬼達がさらに一つの集団を形成し集団行動を行い、盗賊の真似事を行うことを指す。
「ええーその数ーざあっと６００匹くらいなんだそうですー」
「げっそんなにいるのかよ！俺だったら願い下げたいねー」
「異常な数だな。騎士団を四隊・・・それも熟練した隊を呼ばないと駆逐できそうにないな。」
「ああ、軍隊動かしてもいいくらいだぜ。」
騎士団とは常に２０名ほどの騎士達で形成される集団戦の専門家だ。

その中でもかなり熟練した部隊を４、５隊用意しないと６００もの小鬼を相手にするのは辛いだろう。
普通の人間を６００人相手に勝てるようでなければ、まず話にならない。
部隊同士の混乱をおこすのも致命的に成りかねない。
お互いの役割分担を理解しきった熟練の騎士団同士で無いと返り討ちにあうだろう。
「そうなんですー。私達はー騎士団の補助に当たる役割なんですー」
「そうか。がんばってくれ。また、会おう。」
「おう！死んだら唯じゃおかねーからなっ！！」
「はいー。おたっしゃでー」
「・・・・・・」
こうして４人で最後の朝食を摂り終えた。

Return

昼に始まった祭りは夜中まで続き、その間主賓であるレディン達は村人達から感謝の言葉をかけられ、酒を振舞われ、料理を運ばれ、若い年頃の娘達に興味本位な質問攻めに合い、結局祭り終了までゆっくりと休む暇も無かった。

翌日、疲れのためか昼過ぎに起床し、村を出発することになった。

「んあー・・・これからどーする？いったんダィオージュに帰るか？」

欠伸をかみ殺しながらクロノスが言う。

ダィオージュとはクロノスとレディンが拠点としている街の名前である。

「とりあえず、装備やら道具やら一式揃えなおしたいから、ダィタンスリに寄ろう。」

ダィタンスリはここジーグ村からダィオージュの中間地点に位置する中規模な街であり、旅の仕度をするには充分な活気のある発展途上都市だ。

そしてダィオージュとダィタンスリは姉妹都市でもあり、街の雰囲気もよく似ている為、レディン達は好んで利用することが多かった。

「ダィタンスリかー久々だな！山猫亭のおばちゃん元気してるかな・・・きっと相変わらずでけぇ声で怒鳴り散らしてるんだろうな。」

懐かしそうに苦笑するクロノス。

ダィタンスリの『臆病な山猫亭』といえば、昼は安くて美味い食堂、夜は傭兵や冒険者の集まる居酒屋として少しは名の通った店である。

そこの女将は豪快で気さく、傭兵にも偏見もたず、自分の店に来るものには別け隔たり無く接してくれるので皆に慕われている。

時として傭兵や冒険者達は一般人から疎ましく思われる場合もあり、女将の自然な態度は心身疲れきった彼らに安らぎを与えてくれるのである。

「そうだな。久しぶりに顔をだしてみようか。」
レディンも女将の姿を思い出し微笑するのだった。
バルディオスのジーグ村から四日、レディン達はダィタンスリに着いていた。
道具屋で竜角を売り、必要な品物を一式揃えた二人は『臆病な山猫亭』で休息を取っていた。
「品薄なときに売れるなんてツイてたなあ！」
「ああ、市価の2倍近くの値で買い取ってくれたからな。」
「ありがたいこった。こうしてエールをガンガン飲んでも金の心配しなくて良いんだからな。」
そういって喉を鳴らしながらジョッキを空にしたクロノスは更に追加注文をした。
「ゼス達にも分けてやらないと」
「いいっていいて！あいつらは現在仕事中。お金も入ってウハウハだ。」
「しかしだな・・・」
「あああ！お前は真面目過ぎるんだよ！！二人に渡すっつってもたかだか飲み食い数回分じゃんか！」
「金額の問題じゃないだろ。」
「そこが真面目だってーの。もともと価格が上がることを前提に分け前をやらんだろうがっ！！」
「それはそうだが・・・・・・」
「だろ？ならいいんだよ。今度有ったときに酒でもおごってやるくらいでいいんだよ。」
「ん・・・そうだな。」
レディンはしぶしぶ納得したようだった。
『おい、きいたかよ？バルディオスのジーグでリリスが見つかったんだとよ！』
『本当かよ！？で、つかまったのか？』
唐突にレディンの耳に流れてくる近くの若者達の世間話。

『ああ、村長が辺り一帯を山狩りして見つけたらしい。連れ帰ってリリスだと確認されてから打ち首にされたそうだ。身体は燃やして首はさらしものだってよ。今朝村から来た奴に聞いたから間違い無しだ。』
『あそこは火竜も倒されたって話しだし、リリスも殺したってんだったら言うことなしだな。』
『まったくだ。人類に幸あれ・・・ってか？』
軽快に笑う客達。
「・・・俺達のいた村の話だな。」
渋い顔をしているレディンにクロノスが言う。
「ああ。祭りの前の夜そんな事を村長達が話していたよ。」
レディンはそういってエールを飲み干した。
「・・・戻ってみるか？」
じっとレディンを見つめるクロノス。
「なぜだ？」
答えた声が低いことにレディンは気がついてクロノスから目をそらす。
「そうか・・・あの朝お前の態度が変だったのはそう言うことか。」
「・・・・・・」
「ほんっ・・・とに真面目だな。伝承なんかで，聴く，だけのリリスが納得いかねぇんだろ？それに事が事だけに・・・言ってみれば人殺しだしな。」
「・・・そのとおりだ。」
「ま、あいつ等は感覚が麻痺してるか洗脳されちゃってるからよ、人殺しなんて思ってないだろ。畜生殺すのに裁判沙汰で有罪にはならんからな。」
「・・・・・・」
「よし、決まりだ。早速行こうぜ！馬を借りれば丸一日でいけるだろ。」
「・・・お前もいくのか？」

「悪いか？」
「いや・・・べつに・・・」
「そんな顔したお前をほっとけないって事にしとけ。」
「そんなに酷いのか？」
「ああ。今なら魔王も逃げ出すぜ。」
「・・・すまない。ありがとう・・・よし、行こう！！」
二人は女将に軽く挨拶すると店をとびだしていった。

Tragedy

其処には頭首だけがさらされていた。
レディンより少し年下にみえる少女の。
それが古ぼけた木製机の上に無造作にさらされていた。
ここはジーグ村入口。
この村に訪れた者に、必ず目に付く場所だ。
少女の顔は一見安らかに見える。
だが、最後の苦痛が迫るその瞬間を耐え忍んだ眉間の皺がはっきりと残っていた。
「こりゃあ・・・リアルだな・・・」
クロノスは真妙な面持ちでつぶやくとそれきり口を閉ざした。
どこからどう見ても唯の少女の生首でしかない。
リリスだと言われても、やはり人間とまったく同じ姿形をしていては、与えられる印象は同族殺しでしかない。
「・・・・・・・」
レディンはただ黙って少女の亡骸を見据えるだけであった。
その表情は驚くほど無感動で無表情であった。
幾分が時が流れて、村の者が見まわりに来たのだろう、レディン達に気がついて小走りで近寄ってきた。
「ああ！勇者さん！いったいどうしたんですか？」
二十歳前後の青年が、晴れやかな笑顔で語りかけた。
「何か忘れ物でもしまし・・・ひっ！？」
レディンの顔を覗き込んで息を呑む。
笑顔がたちまち恐怖にゆがんだ。
青年に向けられたレディンの眼光は殺気を孕んでいたからだ。
野獣に睨まれた獲物のごとく竦み上がる。
「村長は・・・どこにいる？」
一歩、青年に向き直る為の唯一歩だけ、レディンが足を動かしただ

けで青年はその場にへたり込んでしまった。
「あ・・・ぁ・・・家に・・・」
直感的に自分が殺されるのではないか、という恐怖心の為うまく呂律がまわらない。
更に真正面から当てられた殺気の為、脚が震えて立ち上がることも出来なかった。
「そうか・・・・・・」
それだけつぶやくとレディンは青年などお構いなしに村長の家に向かって歩いていってしまった。
クロノスもちらりと青年をみたが、何もせずレディンの後についていった。
依頼完了後に宿泊した長老の家まで最短距離で進む。
「これはこれは勇者さま、いかが御用で？」
村長の家につくなりすぐさま村長に対面をした。
「何故殺した？」
低いトーンのレディン。
「ころした・・・？ああ、リリスの事でございますかな？」
長老は一瞬何事か思案したが、殺すという単語で結びつくのは其れだけであった。
「そうだ。なぜだ？なぜ殺したんだ？」
怒鳴り散らすわけでもなく、静かな口調だった。
「なぜと申されましても、神様の啓示と代々村に伝わる言い伝えにしたがったまで・・・。それが何か？」
村長はレディンが問いただす姿を訝しげに見ながら答えた。
「何かだと？村長、貴方は村ぐるみで人を殺したんだぞ？」
「これは面妖な事を。たしかに姿形は人間に類似しておりますが、アレはリリスですぞ？」
その言葉に怒りを露にするレディン。
「リリス、リリスというが、彼女の何処がリリスなんだ？！
村人を襲って殺害していたのか？

町一つ廃墟にでもしたのか？
答えてみろ村長！
貴方が彼女をリリスだと判断したのはどんな方法だ！！」
レディンの剣幕にたじろぎながらも村長は答える。
「手配書の特徴と、村の周りの山の中で隠れて暮らしているという不信な所・・・」
「ただそれだけなのか？！
何処の誰が決めたか定かではない手配書の特徴と似ていたから？
他人の空似だっただけじゃないのか？
何処かで野盗にでも襲われ山の中にたまたま逃げ込んだだけじゃないのか？」
「そ、それは・・・」
言いよどむ村長。だがレディンは止まらない。
「彼女は、自分で自分をリリスだといったのか？
命乞いはしなかったのか？
泣いて叫んで殺さないでくれと懇願しなかったのか？！」
「・・・・・・・・・」
村長は処刑のときを思い出しているのだろう。
レディンが言うような情景がその場では確かに起こっていたのだろう。
「それなのに貴方は殺したんだぞ！
確定したものが一つも無いのに、ただ思いこみで一人の少女を殺したんだ！！」
「・・・レディン！！！」
クロノスが一喝する。
「そのぐらいでもうやめとけよ。」
ひどく穏やかに優しく諭すような口調。
「・・・・・・」
「すまなかったな村長。
こいつは人間を守るために今まで辛い戦場を乗り越えてきたんだ。

魔属、怪物といったものから弱い人間達を守る為に自ら危険に身を投じてきたんだ。
それが、リリスなんて不確かな伝説だけで同族殺しを、人殺しを正当化している。
それがこいつにとって納得いくわけが無い、許される出来事じゃないんだ。
だから、ここまで熱くなっちまう。
だがな、村長。
村を治めるあんたが軽率な行いをしちゃいけない。
伝説や、言い伝えを丸のみしちゃいけない。
そこだけは解ってやってくれ。」
「・・・・・・」
村長は押し黙るしかなかった。
自分たちの行いが悪いものだったと認める訳にはいかない。
認めたが最後、村中の人々が犯罪に手を染めた事になるからだ。
だが、レディン達の言った事もまた認めざる得ない事だった。
手配書の似顔絵は媒体となっている紙自体が古く、色あせていた。
”よく似ている”という曖昧な判断を取ってしまったのも確かだった。
そして村人の猟奇的に興奮した雰囲気に流され、ろくな査問会も設けず処刑した。
レディンの言うように盗賊にさらわれ、逃げ回っていた者だったかもしれない。
だがもう遅いのだ。
村長が後悔しようと、謝罪を述べようとも殺めた命は戻らない。
「いくぞレディン。じゃあな村長。迷惑かけたな。」
クロノスに促され部屋から出ていくレディンを、村長は黙って見送る事しかできなかった。
前回とは違い、村を後にするとき一人の見送りも居なかった。
入り口には腰を抜かしていた青年の姿は無かった。

ジーグ村からしばらく離れた林の奥で二人は馬から降りた。
「このへんでいいだろう。」
「そうだな。」
村を出るとき黙って持ち去った少女の首を葬ってやる為である。
レディンは布に包まれた少女の首を優しく側に置くと、
腰に携えてあった剣を抜き、地面に向け構えた。
「はあっ！！」
気合一閃、数十歩先の地面が爆音をあげて吹き飛んだ。
自己に流れる氣を凝縮させ剣にのせて放つ、氣剣術と呼ばれる武術の基本技である。
そこには大人が入り込めるほど深い穴が開いていた。
そこにクロノスが首をいれる。
あとは二人でやさしく土を盛ってやった。
「気が済んだか？」
「・・・・・・すまない・・・俺は・・・・・・」
「気にすンな。俺もお前の姿を見たから冷静になれただけだ。俺一人でアレをみてたら、どうなってただろうな。怒りに身を任せて村長達を殺してたかもしれん。」
いつものおどける様な口調はなく、失笑をもらしていた。
「・・・・・・俺は・・・・・・・もうわからない。命を懸けて守ってきた人間が信じられない・・・・・・・」
「おいおい！村長たちがそうだとしても、全ての人間が信じられないなんて思ってやしないだろうな！？」
「・・・全部だなんて思ってないさ！！だけど・・・ここの人間はどうだろうって疑いが生じてしまうじゃないか！！」
俯き、摩擦音が鳴るほど歯を食いしばるレディン。
「お前はいま、つかれてるんだ。すこし仕事を休んでゆっくりと考えてみろ。」
「・・・そうかもな・・・そうしたほうがいいな。」
そう想いたい、だが、こんな悲劇がもし、もう一度起こるなら・・・

レディンの頭からその考えが抜ける事は無かった。

Cowardly LYNX Arbor

ある日の臆病な山猫亭。
この店は昼は食堂、夕方から夜半にかけて酒場となる。
夜もふけた頃、女将の人柄を慕っての常連客と、美味い料理を出す店と評判を聞きつけた客とで大いに賑わっていた。
此処の女将は元傭兵で、現役当時は《怒れる山猫》と異名が付くほどの実力者であった。
本人は”女に付ける呼び名じゃない”と嫌っていたが、名は体を表すと言うごとく、対戦闘での彼女の動きをよく表現できていた。
瞬発力を生かした、猫型の肉食獣のしなやかで素早い動きに、トドメを指すまで気を抜かない用心深さ。
誰が初めに呼んだのか、山猫とはよく言ったものだった。
ところが、ある依頼実行中に事故に遭い脚を痛め、現役を引退した。
それから暫くして、伴侶と共にこのダィタンスリで店を構えたのだった。
人々の活気と喧騒の中、店の片隅で傭兵風の男達が酒を酌み交わしながら話をしていた。
「また、リリス狩りに出た奴らが殺られたらしい。」
「殺されたぁ？どうやって？」
「最初は村人２０名ほどで山狩りといった感じだったそうだが、長い間追いまわしてるうちにリタイア続出だったらしい。」
「へぇ、軟弱者が多いこって、わはは！」
「まあ、結局最後まで残った４人でしつこく追いまわしてたんだと。」
「４人か・・・まあイケるんじゃないの、普通？」
「ああ、たぶん大人４人だったら問題ないだろうと、諦めて帰った連中も思ってた見たいだ。」
「でも、結局・・・？」

「そう、幾ら待っても帰ってこない４人を翌日捜索したんだと。何とか見つけられたんだが、全員クビをはねられて死んでいたんだそうだ。」
「へえ、怖いねぇ・・・じゃあ今度のリリスは剣をもってるんだ？」
「２年前ジーグ村のトコで殺ったときはそんなの持ってるどころか、反撃も抵抗もしなかったそうだぜ。」
「じゃあ、別人の・・・しわざか？」
「ああ、そう言う可能性があるってことさ。もしかしたら殺し屋に遭遇しただけかもしれん。まーこれは無いだろうがな、ははは。」
「そりゃ、ありえねぇ！わはは。しっかしリリスに肩入れするなんざ、どこの大ばか者だ！」
「手配書じゃイマイチらしいが、実物は結構な美少女らしいぜ？」
「色香に惑わされて、不意打ちでバッサリ・・・なんじゃねえの？」
「わっはははは！そーかもな。」
「そうそう、お前聞いたか？」
「何がだヨ？」
「西方大陸の魔族討伐で有名なナインブレード様の国が陥落したって話さ！」
「ああ、どうやら内部の者がクーデターを起こしたらしいな。」
「近々ナインブレード様が逆襲をかけるって話らしいぞ。」
「へえ、じゃあ、囚われの姫を救出するナイトの登場ってワケだ！」
「くぅぅぅ燃える展開だなぁ！！」
男達の話は別の話題へと変わっていった。

disappearance

レディンの姿は人々の前から消えていた。
ギルドの依頼を請け負うことも無く、
無償で村村を救うことも無く、
西方大陸での魔族討伐で名を挙げることも無く、
誰も居場所を知らず、
誰も何をしているのか知らず、
誰も何を考えているのか知らないまま、
ただ時が過ぎていった。
時は、ジーグ村でリリスが殺害されてから約2年が経とうとしていた。
「ちっ、あの馬鹿野郎・・・どこ行きやがったんだ！」
「まあまあ、探し始めてまだ1年じゃないですか。近隣の町どころか遠方の村々まで彼の姿を見たものは居ないっていうじゃないですか。よほどの隠密行動に出ているんでしょう。そんな彼をすぐさま見つけることができないのは、貴方が一番理解している事でしょう？」
気長にいきましょうよと軽い口調で白いローブを身にまとった青年が悪態つくクロノスをなだめる。
「わかってるよ！でも、俺たちにすら何一つ言わないで出ていったんだぜ？まったく音信不通じゃ流石にのほほんと待ってられないぜ！」
「彼なりに何か考えがあっての行動でしょう。前にも言いましたが、失踪直前に何かあったんでしょう。彼の今までの生き方を変えてしまう何かが。そうでなければ、彼ほどの人格者が書置き一つ残さず行方を晦ますなど・・・失恋ごときで2ヶ月間、行方不明になっていた貴方とは中身が違いますよ。くすくす。」
ローブの青年は最後には笑い出していた。

「昔の事をぶり返すなんて、しつけぇなぁ、終いにゃ友達なくしちまうぜアプリコット？」
「私にはレディンとクロノスが居ればほかに友人は必要ありませんよ。」
一点の曇りも照れも無く断言する。
「ば、馬鹿言ってんじゃねぇ！聞いてるこっちが赤面しちまうわ！さっさと次の村へ急ぐぞ！！」
くるりと身を翻して早足で歩いていくクロノスの耳は真っ赤だった。
「くすくす、素直じゃありませんねぇ。」
微笑みながらアプリコットもついて行くのだった。
しばらくして、不意にクロノスへ問い掛ける。
「次の場所は貴方達の拠点にしていた町だと聞いていますが・・・」
「ああ、ギルドの依頼があったときはあの町に集合できる奴は待機している約束だったんだ。たぶん、行っても本人は居ないと思うが・・・最終目的地の前の寄り道ってところだな。」
「最終目的地？次の町ではないというのですか？」
「ああ。」
「やはりクロノスは思い当たる節があるのですね？」
「さあな。まったく見当違いかも知れねぇ。だけど1年うろうろしてたが、もうそこくらいしか行く場所がないのさ。」
「なぜレディンが失踪したか、貴方は理由に心当たりがあるのですね。」
「まあな。心当たりっていうよりそれだと確信してるよ。」
「ならばどうして今頃？」
アプリコットは少しだけ怪訝な表情になる。
「信じたくなかった。あいつが曲がっているのを信じたくなかった。」
「曲がっている・・・？」
「・・・・・・」
クロノスはアプリコットから顔を背けて黙っている。

「話したくあり、しかし話したく無い・・・といった表情ですね。別に今話さなくてもかまいませんよ。話したくなったときに話していただければ。若しくは本人を見つけて直接聞いてみるのもいいでしょう。」
微笑を崩さないアプリコットにクロノスは言い表せない恐さを感じた。
口調はおとなしく丁寧であるが、間違い無く内心穏やかではないようだ。
「すまねぇ。そうしてもらえると助かる。」
「まずは、町で疲れを落としましょう。」
クロノスとアプリコットの二人はダィオージュへと向かうのだった。

Mystery

バルディオスのジーグ村でリリスが殺害されて約半年の月日が流れた。
レディンは以前に比べると前線に出る事がめっきり減り、自宅で書物を読みふける毎日を送っていた。
書物の内容は偏った物だった。
そう、リリスについての歴史文献や伝説関連である。
あの日以来。
自らの手でリリスを埋葬した日から、レディンはリリスに関するあらゆる事柄を調べていた。
リリスとは何なのか、一体いつから、何のために、殺されては蘇るのか？
過去にもレディンと同じ疑問をもつ者は少なからず居たようで、リリスに関する逸話は数多く残っていた。
特に光の神が降臨したと言われる年代のものはどれも未確認生物の謎的なゴシップが大半だった。

リリスは山一つを消し去った事がある。
リリスは巨大化できる。
リリスは魔王の花嫁である。
リリスは何百と存在する。
リリスは１万からなる軍隊を一瞬で滅ぼした事がある。

などなど。
おかげで書物に書き残されている内容はどれも同じような事柄ばかりであったが、幾つかの書物には興味を惹かれる記述もあった。

リリスは死ぬ直前までの記憶を有して蘇る。

リリスは超破壊能力を有する。
リリスは不老であり、姿形は変わらない。
リリスは死ぬと、数ヶ月から数年を経て別の土地で蘇る。

どれもリリスという存在に深く関連する事柄だった。
そして数年前に、とある山間部にあった村の長老が、ギルドの依頼の礼として渡してくれた古い賢人の自伝的書物。
それに、レディンが衝撃を受ける一文があった。

『此れだけは記述しておかなければならない。
リリスには両親がおり、生まれ育った村があった。
そして光の神が降臨したのはその村であり、リリスが最初に処刑されたのもこの村だったのだ。』

レディンの背筋に冷たい汗が流れた。
その後も様々な書物を読んだが、同じような内容の記述は無かった。
作者の脚色かもしれない。
使い古された昔話をより面白みに富む様、設定を変更したりすることは良くあること。
だが、レディンに強烈に訴えかけるこの一言が、この書物の信憑性を高める。
”此れだけは記述しておかなければならない”
これがリリスに対して強い思いを込めた一文である事は感じられる。
そう、今レディンが感じている気持ちを作者は感じていたのだ。

リリスは元はただの人間だったのだ。

この日を堺にレディンは人々の前からその姿を消した。

meeting again

ダライガー山脈は大小の山々が６つ連なる場所である。
主要都市ではここでリリスを目撃、山狩りをしていた村人が４人殺されたと噂が広まっていた。
当初ジーグ村を目指していたクロノスたちは”臆病な山猫亭”でその噂を聞いてやってきた。
「ここで、４日前に山狩りした者たちが殺害されたのですね？」
「ああ、そしてそれは首を剣一振りでハネられてた・・・。」
クロノスの表情は消沈している。
「・・・・・・やめますか？」
「え？」
アプリコットはクロノスの瞳を覗きながら言う。
「貴方は此処に辿り着いて、村人を殺害したのはレディンだと実感してしまっている。」
「・・・・・・」
「レディン失踪に心当たりがあるとはこの事だったのですね・・・」
「ああ、あいつは二年前ジーグ村で、村長たちに処刑された少女の亡骸を見た。
あいつはリリスなんて信じちゃいなかった。
何百年も不老で殺されても復活するなんて、俺も信じちゃいない。
だけど、現実にこの世の奴らはリリスの存在を信じ、手配書を信じ、リリスを殺せば平和になる、なんて昔の神様が言ったらしい言葉を鵜呑みにしている。
そして信じれば、信じているからリリスを殺す。
ジーグ村の連中を苦しめていたドラゴンを俺達が退治したとき、それは喜んでいた、誰もが幸せそうだった。
レディンも俺達も彼らの役に立ったと思ってた。
これでもう、彼らは無下に死ぬことはなくなったと。

だが、そんな彼らは平然と同属殺しをしていながら、悪びれたそぶりも見せなかった。
それは盲信しているから・・・リリスは人間じゃないと洗脳されているから。
だから仕方無いのかもしれない。
けど、レディンは、兵士でもない人間が村娘のような人間を殺せる、そんな人間達を護る事に疑問を感じちまった。
信じていた心に・・・ひびを入れられちまった。
見ていられなかったぜ、あいつがリリスと呼ばれた少女の首を埋葬したときの表情。
顔面蒼白でよ・・・目の焦点が合って無くてな・・・消えてなくなりそうだった。
あの勇者と呼ばれた男がだぜ？！誰もが恐れる畏怖の対象である魔族相手にだって、ものすげぇ化け物相手にだって、泣き言も吐かず、決して諦めなかったアイツが・・・あんな姿見せるなんて・・・」
クロノスは淡々と台詞を続けた。
レディンを探し始めて一年。その以前から自問してきたものだった。
この問いに対する怒り、哀れみ、悲しみ、情け、その全てをすり減らした。
あとはレディンが変わっていないことを信じるしかなかった。
たとえ、すでに可能性の有る事件が発生していたとしても、自分の目で見て、本人に聞くまで、信じることをやめるわけには行かなかったのだ。
「わかりました。まだ、レディンの犯行と決定したわけではありません。
直接彼に問いただしましょう。
貴方がどうするかなんて・・・それからでも遅くないでしょう？」
「ん・・・そうだな。サンキュ、やっぱお前に話してよかった。」
「まあ、その辺の人が聞けば変人狂人扱いされるような内容でしたからね。」

アプリコットは笑いを含みつつ言う。
「そーだよなー。人類の敵、災いの元凶リリス・・・それを人間から護ってるなんてなー。出来の悪い喜劇みたいだぜ。」
少しだけ元気を取り戻したのか、いつもの口調に戻るクロノス。
「それで、これからどうしましょう？」
「そうだな・・・４日前にこの辺りだったんなら、もう居なくなってると思うが・・・念のためにハッパかけてみるか？」
「さて、どんな方法でいきましょうか？」
しばらく悩む二人・・・するとクロノスが何かを思いついたように口端を上げる。
「あそこにある背の高い木があるだろ？あれにカミナリ落としてくれ。うんと派手な奴な！」
クロノスの指差したのは林を踏み込んだ先にある周りの木より飛び出している大木だった。
「・・・何を思いついたかと思えば、単純明快かつ大胆極まりないですね・・・」
「近くにあいつが居れば、俺達を必ず見つけにくる。居なければ・・・ただの落雷として、大事にはならないさ。」
ケラケラと笑っていいのけるクロノス。
「人事だと思って軽く言ってくれますね。しかし、それが一番早い手段であることはわかりました。」
アプリコットは地面に円と三角そして四角を組み合わせた法図式を描いた。
「雷の精霊さん、私の願いを聞き届けてくださいな。」
描かれた法図式の上に立ち、目を閉じて集中する。
「あいかわらず簡単でわかりやすい呪文だなあ。」
ぼそりと小さくつぶやくクロノス。
しばらくするとアプリコットの周りに黄色い閃光が短く光りだした。
傍から見るとアプリコット自体が放電しているように見えなくも無い。

そしてそれは突如大きく光るとアプリコットの真上に伸び上がり、
そのまま放物線を描きながらクロノスの指した大木へ直撃する。
すさまじい爆音と大木の引き裂かれる音があたりを支配する。
「っくぁーーー派手でいいねぇ！」
「勝手なことを・・・ありがとう精霊さん。」
上機嫌なクロノスに対し、平然としているアプリコット。
目標にされた大木は真っ二つに裂け、上半分は炭になり、幹に近い残りの部分は小さな火がともっていた。
「いやはやいつ見てもすげえなあ。精霊使いってのは。」
「決してすごくなんかありません。ただお願いして力を借りているだけですから。」
アプリコットは精霊使いと呼ばれる魔術師である。
魔法使いとは、世界や物質に含まれる魔力を公式や法則をもって自在に操る人のことを指す。
魔力を行使する方法は別にもある。
そのひとつが今アプリコットが使用した精霊召喚である。
この世界に存在するすべての物質に宿る精霊に協力してもらうことで様様な出来事を行う人を精霊使いという。
精霊は普段からその場所に居ることが多い。
ただ人に見えないだけなのだ。
精霊に好意的で、敬い尊重する、一種宗教的な思想で彼らの信頼を得て友好関係を結んだ者しか助力を授かる事は出来ない。
数多の人間が精霊使いを目指し、修行を重ねるが、実際に精霊と心を通じ合えるのはほぼ皆無である。
その方法は口伝、書物に残されようと、実践し、己の者に出来たものはこの世の表舞台に出ることは無い。
精霊使いとなった彼らは精霊を敬う。彼らの信頼を裏切ることは出来ない。
表舞台に上るということは彼らの信頼を裏切る機会を自ら作り出すことになるのだ。

ドス黒い欲望や、利権まみれの汚濁した精神などに精霊は共感を得ない。
故に精霊使いとは伝説上のもので、実際には使用不可能だと、酷い者は出鱈目であるともいうほどだった。
アプリコットは精霊使いである。
しかし、過去の精霊使いがそうするように、彼もまた歴史の表に出ることはない。
ギルドに登録することもなく、慈善や偽善で人々を助けて回るわけでもない。
ただ、己の精進のため、力を貸してくれる精霊の為に生きている。
彼が”人間”の生活をするのは奇異の目をもたれない為の隠れみのの役割にすぎない。
レディンやクロノスのようなごく少数の人間にしか正体をあらわすことは無い。
そして彼らのような信頼に値する人間にしかその力を貸し与えることも無い。
それはまるで、精霊使いと精霊との信頼関係に酷似している。
「よし、それじゃあそこの近所で待ってますか。」
「・・・来るでしょうか？」
「来るぜ。」
「こういうときの貴方の勘は怖いぐらいに的中しますからね。安心して待っていましょう。」
二人は煙を上げる大木に向かって歩き出した。
しばらく進むとクロノスとアプリコットの顔から余裕が消えた。
大木めがけて一直線に進んでいる。
その目的地になじみのある気配を感じているからだ。
それはその存在を知らしめるかのように強く放たれている。
「これだけ気配だしてちゃ隠密失格だな。」
「私たちを呼んでいるのでしょう。」
その言葉を裏付けるように、大木の下にレディンはいた。

「・・・クロノス・・・アプリコットまで・・・・・・」
二人を見たレディンの声色には動揺の陰りを含んでいた。
「よう。1年半ぶりか？ははっそういえばバルディオスの竜退治にいくときも同じような挨拶してたな。」
「お久しぶりですレディン。貴方と最後に顔を合わせてから4年は経つでしょうか。」
「・・・・・・何しに来たんだ？」
警戒色を含んだ台詞を話すレディン。
「そりゃ・・・」
「単刀直入に聞きます。今の貴方は何をしているのですか？」
クロノスを制しアプリコットが詰問する。
「・・・・・・」
レディンは二人を睨むように見つめる。
「私達には話せませんか？話せないような事を貴方は、今実行しているのですか？」
「あ、あのさ、もしかして俺達の勘違いかもしれないんだけどさ・・・」
「クロノス、貴方はいいです。今は私がレディンと話しているのです。黙っていてください。」
歯切れの悪い会話のクロノスを完全に黙らせる。
アプリコットはクロノスがまだ迷い、自分の気持ちにも踏ん切りを着けられないで居る事を理解していた。
だからこそ、この会話は自分が主導の元しなければならない事も理解していた。
クロノスとレディンだけでは感情のぶつけ合いにしかならないであろうことは予測できたからだ。
「話せないのなら私の問いに頷くだけで結構です。
それでは伺います。貴方は今、リリスを護っている。そうですね？」
その直接な質問にクロノスが息を呑む。
たいするレディンは無言のまま首を立てに振った。

「わかりました。次にリリスを護るがゆえに人間を殺しましたね？」
レディンは二人に聞こえるほど歯を食いしばりながら頷いた。
「お前やっぱり・・・本当に・・・」
それを見たクロノスが力が抜けるように吐き出した。
「半月ほど前・・・初めて彼女を・・・リリスを見た。」
終始無言だったレディンがぼつりぼつりと語り始めた。
「見て驚かされたよ。只の少女だった。本当に何の変哲も無い只の少女だった。
手配書に描かれた特徴はよく彼女を捕らえていたよ。
多少の違いを覗けば本人であることは断定できるほどよく似ていた。
しかし、だからといって彼女がリリスである証拠があるわけじゃない！
それをこの世の人間達は手配書に似ているという理由から、何人も殺してきた・・・
リリスという存在が実際にいるとしよう・・・今の彼女がリリスだとしてだ、
気の遠くなる昔、あんな年端の行かない年齢の時から延々と殺されてきたんだ！
家族との暖かな生活も、胸踊る将来の夢を語る友も、生涯を友にする異性との出会いや恋愛も！
全て他人のせいで彼女は無くしているんだ！！
それだけじゃない！ただ殺されるだけじゃない！！
リリスを殺そうとする人間達に・・・およそ人間が抱くタブーをその身体に行われてきたんだ！
彼女がいったい何をしてきたっていうんだ・・・
いままで読んだ書物には予想や推測されたものばかりだった。
強大な秘めた力があり、山一つ消した、捕縛しようとした軍隊を一瞬で消し炭にした、魔王の花嫁だ・・・どれも今の彼女に当てはまらない童話めいたものばかりだ。
男達に追いまわされてもそのか弱い身体を酷使してひたすら逃げ回

るだけだった・・・抵抗するなんて一度も無かった。
強大な力があるなら、彼女はそれで身を護ってるはずだ、日々自分を狙う人間達をそれで逆に葬ってしまえばいい。
しかし、結局彼女は逃げることを選んでる、自分が傷ついても相手を傷つけない方法を選んでいる！
そんな彼女はドス黒い欲望だけで弄ぼうとする人間達にも情けをかけているんだ！！」
「レディンお前・・・・・・」
「許せないんだ・・・どうしても人間が許せないんだ・・・・・・。
でも、嫌いになりきれない・・・だから・・・どうしたらいいのかわからない。
わからない・・・けど彼女に迫る危険は回避できる、回避させられる。
だから俺は彼女のそばで護り続ける。
邪悪な人間に追い回されず、ひっそりと平穏無事に過ごせるよう、そして、できることなら人間に戻らせてやりたい。
そのためなら・・・自分の心を潰しでも人間を退ける！」
「馬鹿野郎！それじゃあ、全世界の人間と、神をも敵に回す気かよっ！？」
「俺は彼女を護る。それが人類を・・・神を敵に回すというのなら、望むところだ、この異常な狂乱が終わるその時まで、相手をしてやるだけだ！！」
レディンは踵を返すと振り返りもせず立ち去っていった。
「レ、レディン・・・・・・」
クロノスはその場で膝を付いてうなだれた。
自分の中のレディンが、信じていた親友があれほど変貌していたのだ。
想像していた一番最悪の形が具現化している。
「クロノス・・・」
アプリコットが声をかけるが、クロノスは反応しない。

「レディンは人間の暗黒面をリリスという存在を通して観てしまったのですね。
人間は光と闇、両面を持つ不思議な生き物です。
光ばかりを見て、それを信じてきた彼には闇の部分を受け留めるには心が純粋すぎたのでしょう。
拒絶することで今を保っている不安定な状態です。
人間に失望することで、リリスを護る事で自分の存在意義を見出しているのですね。
このままでは人類はレディンを排除する方向で動き始めるでしょう。
災厄の源、人類の共通の敵であるリリスを守護するなど知られれば、近隣諸国の軍隊まで出撃させられかねません。
我々がこのことを黙っていてもいずれ知れ渡るでしょう。
だから・・・出来ることを出来るだけやらなければ。
ここで頭を垂れているのは楽でしょうが、一生後悔することになりますよ？」
クロノスは無言で立ち上がる。
「そうだな、このまま放っておくわけにもいかねぇ。とことんアイツと会って話をしなきゃな！
俺としたことがたかが一度だけで何を弱気にすべて終わったなんて諦めてたんだか！！」
「その調子ですよ。」
アプリコットはにこやかに笑った。
「もう、同じ方法で呼び出すことはできねぇな。」
「そうですね。」
「よし、リリスの足取りを追いかける形にしてみるか。」
「このまま闇雲に追いかけるのですか？」
「いいや、こういうときは情報屋で最新情報を聞くに限る！」
クロノスとアプリコットは情報屋を目指しその場を後にした。

With a sigh

少女は目を覚ました。
辺りを見渡すと日も暮れて暗闇に包まれていた。
自分の居場所は変わらない。
昨夜追いまわされ、意識が途絶えた後、誰かに傷の手当てをしてもらい、毛布にくるまれたこの場所にいた。
どうやら泣いている内に再び眠っていたようだ。
ここ数日延々と追手から逃げる生活を続けていた。
寝る暇も惜しんで、ずっと歩きつづけた。
しかし、何処をどう進んでも、追手との距離は開かなかった。
そして、ついに昨夜は距離を縮められ、もう捕まってしまうと覚悟していた矢先、極度の疲労から気を失っていたのだ。
少女は自分の状況を思い出して身震いする。
そして、再び辺りを見回す。
・・・誰もいなかった。
いつも追いかけられている時に感じる人々の念が今はさっぱり感じられなかった。
逃亡中についた体中の細かな傷は手当てされたお陰で痛むことは無い。
また、いつも野晒しで眠っていたが、今回は毛布があった為眠りが深かったようだ。
半日も同じ場所で眠っていたなんて信じられなかった。
この数百年、いつ人間に見つかるかわからない為、隠れて寝ていても気が休まることは無かった。
一箇所に居続けると発見されやすくなるため、移動を繰り返す。
大きな木の洞、洞窟、茂みの中などで息を潜めて眠る。
リリスと呼ばれ、実際何度も殺されたが、何故かこの世に蘇ってしまう。

そんな化け物に成り下がろうとも、走れば疲れ、疲れれば眠くもなる。
生きていれば腹が減り、傷を負えば痛みが走り血も流れる。
なんと理不尽なのだと、神を呪った事もあった。
だが、呪うだけ疲れるだけなので、もう考えないようにしている。
くぅ、と可愛らしく少女の腹が鳴った。
少女はこの状況に驚いていた。
自分が安心している。いつ見つかり、惨殺されるかもしれない生活を数百年送って来た自分が、暖かな毛布に包まり、安らかに眠っていた事実に驚きを隠せない。
不意に涙があふれた。
こんな、たったこれだけの安心を今までずっと忘れていたなんて。
今の自分は考え事が多すぎて混乱してきている。
この数百年の生活で、少女は人間らしい思考回路の殆どを封印していた。
逃亡生活に邪魔な楽しさ、喜びなどの感情を押し殺し、如何に人間に見つからないか、どうすれば逃げれるか、それを最優先に考える思考パターンを構築してきたのだった。
過去を振り返る暇など無かった。
生きることに喜びを感じていた時代は幻想。
出会えば殺害される現実。
死んでも蘇るが恐怖と痛みは何度味わっても軽減されることは無い。
出される度に味の違う料理。
一つも組み合わないパズル。
人間の考え抜いた殺傷方法のなんと豊富に飛んだことか。
獣ならば己の牙と命を武器に戦うだけである。
だが、人間は違う。
如何に殺さず苦痛を与えることが出来るか？
などとふざけた理由で平然と思考回路が活動する。
理論的、道具的、精神的、肉体的、合理的・・・

あらゆる局面を馬鹿丁寧に想定し、結果を出す事に至福の喜びを得る。
人間の有能な一面でもあり、際限の無い欲を生む一面でもある。
求めぬ方向へ向かえば最悪を。
求める方向へ向かえば最善を。
そんな最悪をこの身に受けてきた。
あんな邪悪で凶悪で醜悪なモノと戦えるわけが無い。
昔は毎年のように殺された。
自分は無害だと主張し、人間であると訴え、信じてほしいと懇願した。
しかし、誰もまともに取り合わない。
人前に出て行けば捕まり、殺される。
そんなことを繰り返していた少女は逃げることを必然的に選択していた。
人間の欲望から、痛み、死、希望から逃げることだけを思考に費やした。
その学習能力と生存本能のおかげか、殺される率は減っていった。
長い期間生きることが出来る喜びを感じるわけでもなく、ただ、殺されないだけの生活を続けているのであった。

少女は思った。
まるで夢のようだと。
自分が平凡な少女であった頃に感じた安心感や喜びを感じている。
しかし思考はそこで現実へと戻る。
そう、今のは夢でしかない。
いま、この瞬間にでも人間に見つかれば、捕まり、欲望のはけ口にされ、殺されるのだ。
すでに同じ場所に1日いることになる。
ふぅ、と1つ深い溜め息をついた。
少女は思案する頭を数回振ると身体を起き上がらせた。

毛布からさらけ出された身体が夜の冷たい風を受け、身を振るわせる。
そのお陰で引き締まった。
何処の誰かはわからないが、傷の手当てをし、毛布まで掛けてくれた事に感謝をし、一時でも人間らしい夢を見させてくれたことに感謝をする。
少女は深深と頭を下げて礼をした。
一刻も早く別の場所へ移動しなければ。
少女の思考回路はすでに生存本能の復帰とともに優先順位を切り替えていた。
この先には迷いの森と呼ばれる広大な森林があるはず。
そこに一旦身を隠そう。
暗く冷たい夜の森の中を明かりも持たず、月明かりのみで少女は移動を開始した。

Obstruction

２０人からの集団が森の中で立ち往生していた。
「そこをどきやがれ！」
「邪魔すると只じゃすまねぇぜ、ニィちゃんよお！」
男達の激昂が響く。
立ち塞がりし者は臆しもせず、ただ一言つぶやくのみ。
「死にたくなければ帰れ。」
先頭の５人の表情が怒りに満ちてゆく。
「な・・なめてんのかテメェ！！」
「殺されても文句言うんじゃねぇぞ！！」
口々に罵声が飛び出す。
無理も無いことだった。
彼ら集団はこの近辺にリリスが居ると情報を掴んでから１週間追跡し、やっと発見した。
そして、後一歩で目的が達成されようとしている所に、見ず知らずの青年に邪魔をされ、尚且つあの一言で彼らは虚仮にされたと思ったのだ。
唯でさえ、理性的な考え方が苦手な者達だったので、その生まれた感情はすぐさま行動に表れた。
先頭の５人の誰かが不意打ち気味に弓を射ったのだ。
青年のほうは仁王立ちしている様に見えるが、すでに臨戦体制を取っていた為、難なく矢を片手で無造作につかんで見せた。
集団はその動作にたじろぐ。
殺す気で放った矢が素手で容易く掴まれたのだ。
余程の実力者で無いと到底出来ない芸当である。
「レディン殿とお見受け致す。ここはテュポン戦士団のフェパイストの顔に免じて部下の粗暴をお許し願いまいか？」
集団の中から細身の長身の男が出てきた。

レディンの前に立つ、その距離２メートル強。
フェパイストは面の開いた兜をかぶり、胴体を包む鎧をまとい、見た目は戦士というより騎士といった身なりであった。
この集団は立ち振る舞いは粗暴だが、彼らは知能レベルの低い盗賊ではなく、ギルド所属の戦士団である。
近隣の町よりギルドにリリスらしき人物がいるので本物なら排除、間違いのないよう確認してほしいという依頼が入った。
それを受けたのが彼らテュポン戦士団であった。
団長のテュポン率いる総勢７０名になる、戦士団としては１０指に入る大きさだ。
今回の依頼には２０名の部下を率いて副団長補佐フェパイストが指揮を取っていた。
「テュポンのフェパイスト殿か・・・大した威圧感だ・・・」
レディンの眉が少しだけ歪む。
立場こそ副団長補佐を勤めるフェパイストだが、純粋な戦闘能力では団長のテュポンにも引けを取らないと云われている。
ただ、率先して自分が矢面に立ちたがる戦士気質が災いし、団体での作戦指示には不評を得ている。
「西方大陸の魔族討伐で名をはせる勇者様が、どうしてこのような場所で私達の邪魔をするのか・・・よろしければ理由をお聞かせ願いたいところです。」
口調は丁寧だが、その殺気は隠そうともしない。
「何人たりとも、ここを通すわけにはいかん。」
「ふむ。理由は聞かせてもらえそうに有りませんな。
しかし私達はどうしてもそこを通らなければなりません。
どうすればそこを通していただけるか・・・条件などございませんか？」
「あえて言うなら・・・今日一日は通すことができない。」
レディンは表情一つ変えずに言う。
「それはこちらとしても受け入れられるものではありませんな。

なにせ、急用がございますゆえ・・・どうしても通して頂けませんか？」
「駄目だ。諦めて別の道を探すがいい。」
「そうですか、ここまで申し上げても聞き入れて頂けないとなりますと・・・」
フェパイストの殺気が急速に膨れ上がる。
「力ずくで殺らせてもらうしかねぇよなぁ！！」
完全なる不意打ち。その顔は勝利を疑わない不遜な笑みを称えている。
剣を抜いた事さえ気がつかせず、大きく一歩踏み込んで上段より細身剣を振り下ろす。
自分の長身と細く長い剣を使った2メートルの間合いを物ともしない剣戟である。
しかしそれはむなしく土に衝く。
レディンは左足を軸とし、素早く体を後方回転させ、
上段からの縦の攻撃をかわしつつ、遠心力をつけた上で抜き放った剣を横薙ぎにした。
フェパイストの切り離された上半身が宙を舞う。
下半身は一歩踏み込んだ状態のままだ。
周りにいた戦士団員は瞬きするまも無くその結果を見せ付けられた。
「ほかに通りたい奴がいるならば、相手しよう。」
レディンは戦士団員に剣を突き付ける。
「う、わあああああああ！！！」
一人が悲鳴を上げると、他も皆一斉に声を上げる。
皆が皆思うが侭に逃げ戸惑う。
理性的な撤退ではなく逃亡。
蜘蛛の子を散らす様に戦士団はいなくなった。
レディンは剣に付いた血を払うために素早く一振りすると鞘に収めた。
レディンが立ち去ったその場所には勝ち誇った笑みが残るフェパイ

ストだった物が横たわっていた。

Warriors team Typhon

テュポン・ストラボンは鋭槍のテュポンと呼ばれるほど世に名を知らしめた一流の戦士だ。
如何なる大群を前に彼の突進を止めることは出来ないと云われ、その光景はさながら鋭い槍で突き刺し抜くがごとく。
自然、彼に憧れ慕うものが寄り集まってくる。
そうして出来たのがテュポン戦士団だった。
数々の依頼をこなし、始めは数人だったものが、いまでは全団員数７４名からなる、著名な戦士団だ。
彼を筆頭に副団長デュオニス・キマイラ、副団長補佐フェパイスト・イリエアラが脇を固め、ギルドの依頼にあわせて編隊を組む手法を取る。
今回のリリス確認の依頼には副団長補佐フェパイストに２０名の部下を率いて当たらせた。
ダライガー山脈へ向かわせて１週間と２日がたったとき、彼の元に騒がしく伝令役の団員が飛びこんできた。

「団長、フェパイスト様がやられやした！」
「・・・」
「へい、相手はあの西方大陸の魔族討伐で有名な勇者レディンでやす！」
「・・・」
「へい、確かな情報でやす。リリスを追う途中、レディンと遭遇。副団長補佐は奇襲するも、討ち死にしやした。」
「・・・」
「へい、一撃でやられたそうでやす・・・」
「・・・」
「残った団員達は全員逃げ帰ってきやした。」

「・・・」
「へい、死人は副団長補佐だけでやす。」
「・・・」
「へい、確かに不甲斐ないでやす。」
「・・・」
「へい、今回の依頼はキャンセルしておきやす。」
「・・・」
「へい、副団長に・・・」
「・・・」
「へい、敵討ちの精鋭を選出しておくんでやすね。」
「・・・」
「へい、早速通達してきやす！」

そう言うと伝令役の団員が飛び出していった。
始終険しい表情だったテュポンの口元には笑みともとれる変化が見られたのだった。

Find Trace

都市ゴーディアン。
ダィタンスリより南に１０日ほど馬を走らせると現れる都市だ。
南から中央へ移動する際の中継所として賑わう町で、様々な人種が集まってくる。
クロノス達が拠点としているダィタンスリは人口１万人の街であるのに対し、ゴーディアンは人口５万人を超える都市である。
この都市でもっぱらの噂はリリスが目撃されたという事である。
ゴーディアンほどの都市ならば、毎日大量の情報が飛び交い、一般大衆の想像、虚言、誇大解釈などに気をつけねばならない。
ここ情報屋”豪胆な野鼠”も最近は大忙しであった。
ギルドより正式にリリス探索依頼が発行され、幾つものグループからの問い合わせに翻弄されているのだった。
次々と最新情報は書き換えられていくものの、その大半は虚言じみたもので、真実と思われる情報の査定に手間取っているのである。
情報屋はまず、扱う情報が真実であり、その信用が永久的に失われない事であると豪語するのは、店長ヘルメス・メルクリウス（３２）華の独身女性である。
「あーはいはい、勝手にしな！」
「そうか、ありがとな！」
クロノスは満面の笑みを浮かべる。
ここは情報屋内部の最奥にある店長の執務室だ。
「しっかし、レディンを追いかけてると思えば今度はリリスかい？もう、だいぶ有名どころにリークしてるから、今ごろとっつかまってんじゃないの？」
「たぶん、まだだよ。」
「へえ、なんでわかるんだい？」
渋い顔のクロノス。

「あんたの所にレディンの情報が入ってきてないからさ。」
「何の事だい？失踪勇者とリリスに何か因果関係でもあるってのかい？」
「さあな？それを確かめるつもりさ。」
「・・・まだ、一般には出回ってない情報だが、アタイの勘が騒ぐから、あんたに教えてあげといてやるよ。」
ヘルメスは渋い顔をして話し始めた。
数日前リリスを探す為に山狩りをした付近の村者が４人首を跳ねられ殺された事。
テュポン戦士団はリリスを追う依頼をギルドから受けていた事。
そして昨日テュポン戦士団のフェパイストが何者かに殺された事。
「・・・・・・ちっ」
クロノスは隠しもせず舌打ちする。
「あんたまさかっ！！」
ヘルメスの大声に、外にいた警備の者が３名、部屋になだれ込んできた。
ヘルメスはクロノスを睨み付け、わなわなと体を震わせている。
クロノスは無反応でヘルメスを見つめ返す。
「何でも無い・・・さがっていい。」
ヘルメスは警備の者に目も合わせずに告げる。
３人は部屋から無言で立ち去っていった。
「あんたはレディンを追ってた？」
「ああ。」
「いつから・・・失踪してたんだい？」
「２年ほど前。ジーグでリリスが殺された半年後には誰も見かけなくなっちまった。」
「どうして？」
「・・・あいつはリリスを護ってる。」
「・・・・・・かはぁーーーー」
大きく深く息を吐き出すヘルメス

「なんなんだいあの坊やは！正義の味方！我らが勇者様っ！！
それが・・・なんでよりにもよって、この世の災いの元と言われるリリスに肩入れしちまったんだい！！」
怒っているのか呆れているのか、半ば笑いながら吐き出す。
「だからさ。」
「なにがだい？」
「正義の味方、我らが勇者様だから、リリスの守護になったんじゃねぇか。」
クロノスは真正面からヘルメスを見据える。
「・・・言ってる意味がよく理解できないねえ？リリスは全ての人間の、いわば世界の敵。それを護ってるなんておかしいじゃないか！」
「あいつは人間が心底好きだった。
だから、命も顧みず危険な化け物退治やワザワザ西方大陸へ魔族の討伐に参加もした。
弱いものが居れば、全力で助けようとするのが奴なんだ。」
「だから、弱い人間の・・・」
「そのクソ弱ぇ人間がリリスという”少女を惨殺”してんだろうがっ！！」
「っ・・・・・・」
クロノスの剣幕にヘルメスは言葉を呑む。
「2年前のジーグ村であいつは見ちまった。
年端も行かない少女の生首が目の前に晒されているのをよ。
村ぐるみで近所の山に居た少女を、リリスの手配書に符合したからって打ち首にして村の入り口に晒しものにしてたのさ。
あいつは村長に詰め寄ったさ。なぜ殺したのかってな。
村長は普通に答えたさ。
”山に怪しい少女がいて手配書にそっくりだったのでリリスと決めてコロシマシタ”ってな。」
「あ・・・・・・」

ヘルメスが息を飲む。
「俺もその場にいたが、あれが本当に手配書のリリスだとはとても思えねぇ。
確かに似てはいるだろうよ？だが普通の女の子だぞ？
それが無残に殺害されて、周りはお祭り騒ぎだぜ？
俺だって吐き気がしたぜ。
なんでコイツら笑ってられるんだってな。
俺だってそう思うのに、今まで弱き人々の為に身を削って護ってきたアイツはどうだったろうな・・・
俺みたいに手前ぇが良けりゃあなんて思ってる奴には、どんなに傷ついてたか想像もつかねぇや。
あいつは村から出て、俺にこう言ったんだ。
”人間が信じられなくなる”ってな。」
「！？」
「あの時はとっさに全ての人間が同じじゃねーなんて言っちまったけど、今の状況みりゃ、それが気休めだって誰だってわかるわな。」
「じゃあ、本当にレディンは・・・」
「・・・・・・・。」
「・・・ふぅ。なるほどね。急な話で本当びっくりしたよ。
あーもーなんで、こう、クソ真面目なのかね、あの坊やは！」
「ははは。レディンだからしょうがねーじゃん！」
「確かに・・・真面目だから、じゃなくて坊やだから真面目か・・・」
「・・・・・・」
「あんた、しっかりしなよ？最悪の展開になるかもしれないんだ。
親友のあんたがしっかりしないと、誰があの坊やの助けになれるってんだ！！」
「言われなくてもわかってるさ。だから、ちょっくら会ってくるわ。」
「ふん、子供のお使いみたいに軽くいうじゃないか。」

そういいながらも二人からは笑いがこぼれていた。

「もうよろしいのですか？」

情報屋の入り口横で一人待っていたアプリコットが出てきたクロノスに声をかける。

「ああ、情報は最新、更にオマケもつけてもらった。」

「オマケ？」

ひらひらと一枚の紙切れを見せた。

「何が書いてあるのですか？」

「へへ、いってみりゃ、アイツの痕跡ってやつさ。」

クロノスの持つ紙にはあのフェパイストの殺害された場所と地図が明記されていたのだった。

Enter a State Of War

山と山に挟まれた裾野に広がる森林地帯。
迷いの森ライディン。
都市一つ丸ごと収まるほど広大な森は街道を一つ外れると迷って出られなくなる・・・
と近隣の村々の者でも近づく事がない場所。
昔から魔女の隠れ家、悪魔が住むなどの噂は絶えず、実際に立ち入った人間のほとんどは帰って来ることはなかった。
ここにリリスが逃げ込んだことは周知の事実であったが、立ち入るものは少なかった。
リリス捜索の為に森に踏み込んだグループは５つ。
最初に、名声目当ての近隣の村の若者達１７名が。
次に、団長テュポン率いるテュポン戦士団２５名。
３番目に、遠く離れた西方大陸へ魔族討伐に向かう途中だったアレスマルス騎士団から野心あふれる者達８名。
４番目に、ギルド任務に志願した、珍しく女性で団長を勤めるティシフォネ率いる新鋭の戦士団フリアエの１０名。
そして、最後にクロノスとアプリコットだ。
森の中心部に向かって進むクロノスの表情は険しい。
森の奥に進むにつれ独特の鉄に似た匂いが徐々に強さを増しているからだ。
「相当数の犠牲者が出ている様ですね。」
アプリコットは無表情に言う。
「わかってるって！至る所で殺り合いしてんだろ。
いったいどれだけ入り込んでやがるんだ・・・」
クロノスは苛立ちながら言う。
「この現況が彼らの潰し合いなら良いのですが・・・」
「・・・・・・」

クロノスはアプリコットの一言で更に不機嫌になった。
そう、彼はこの血の匂いの元が、レディンの仕業である可能性に苛立ちを隠せないでいるのだ。
「クロノス、先ほどから一直線にこの森の中心部を目指して進んでいる様に思えるのですが・・・？」
「ああ、このライディンの森は広大な面積のせいで街道を外れると目印もないから迷っちまう。
だが、中心部はそうでもない。中心部は結構奥深くにある為、そうそう人が踏み入れることはないんだが、あそこに行けば、どこに向かうかわかりやすくしてもらえるんだよ。」
「貴方の言い方だと、まるで道案内でもあるかのようですね。」
「まあ、そんなもんだ。とにかく急いでいくぜ。」
クロノスはそう言うとアプリコットの返事を待たずに走り出した。
アプリコットも1度頷くとクロノスの後に続いた。
この二人から少し離れた場所、山側に近い付近でテュポン戦士団とアレスマルスの騎士達との睨み合いが続いてた。
数の上ではテュポン戦士団が3倍・・・しかし、相手は騎士8名。
戦士とは基本的に多数対多数の乱戦を得意とする。
対する騎士は1対1の決闘を重きに置くが、統率の取れた集団連携は秀逸であり、また個々の能力も高い。
数の上では勝っていても総力で言えば均衡しているといえる。
お互い出来るだけ被害は押さえたい、だが、リリスを横取りされるのも腹立たしい。
膠着状態はかなり前から続き、お互い打開策を模索するのに後しばらくかかりそうだった。
一方この場所より森の中心近くの場所では惨状が広がっていた。
元は人間だったと思われる部品が至る所に散乱していた。
森の緑を塗り替える様に血で染まった赤がどこを見渡しても目に飛び込んでくる。
この森に立ち込める鉄の匂いの元凶であった。

そこで未だに赤く染め上げつづけている者達がいた。
「ちぃぃぃ、オマエほんとに人間か？違うよな、この化け物が！！」
化け物呼ばわりした相手から放たれた剣戟は仲間を盾に身をかわし、鉄の棒を一方だけ鋭く削り上げた釘のような物を投げつける。
戦闘中に相手に悪態つく、その人物はフリアエの女性団長ティシフォネだった。
１０名居た団員はすでにティシフォネを入れて６名・・・。
そしてまた一人、ティシフォネの盾にされた団員は軽装な戦士には必需品である鋼鉄の胸当てごと肩から腹までを切り裂かれた。
「ぎっ」
そして短く悲鳴を上げると、その場で鮮血を噴出しながら絶命した。
こうした光景を見せ付けられた団員は尻込みし、必要以上に広い間合いを取るようになっていた。
ティシフォネが相手の攻撃をかわす為に利用できる盾はもう近くには居なかった。
投げつけられた釘型の飛び道具は、軽い金属音と共に地面に落ちた。
「・・・・・・」
と同時に相手が無言でティシフォネとの間合いを詰めにかかる。
「くっ、涼しい顔で流すじゃねぇか。だが、正攻法ばかりじゃ、俺には勝てねぇんだよ！！」
男勝りに激昂すると、間合いを詰める動作の相手に腰の手斧を投げつける。
と同時に使い込まれた重量級の両手剣を袈裟懸けに振り下ろす。
手斧を剣で弾けばその隙を、避けようとすればその隙を狙うつもりだった。
しかし、相手は神速で真横に跳躍し、手斧の軌道から外れる。
「な・・・！？」
その目で追えない動きを感覚だけで感じ取ったティシフォネが驚愕する。
しかし、すでに振り下ろされようとする両手剣はその重量が災いし

て体勢を戻すことが出来ない。
一度視界から離れた相手は次の瞬間再び視界の隅に現れた。
「ぐっ・・・・」
低い呻きと共にティシフォネの身体が前に崩れ落ちる。
腹に剣の柄を当てられ気絶させられたのだ。
それを見ていた４人のフリアエの団員は甲高い悲鳴を上げながらその場から逃げていった。
その場に残ったのは気絶したティシフォネと・・・
一番最初に森に立ち入った若者達と、フリアエの計２０名にも及ぶ切り刻まれた人間の部品だけだ。
ティシフォネと闘っていた相手、レディンは剣を鞘に収めると、気絶しているティシフォネを抱え挙げ、森の中心部へと姿を消した。

Rematch

突然の来訪者に、睨み合う二つの勢力は驚き混乱した。
主要な街で、大きく噂になっているのはリリスの話だけではない。
2年近く人々の前から姿を消している勇者の話もその一つだ。
そしてその勇者が何の前触も無く目前へ、睨み合っている境界に踊り出てきたのだ。
「れ、レディン様！？」
その姿を見たアレスマルス騎士の1人が声をあげる。
途端、回りに集まっている者達がざわめき始める。
これから西方大陸へ向かうアレスマルス騎士にとって魔族討伐の功労者であり、弱きを助けるその信念から、勇者と賞賛されるレディンは羨望の対象であり、目指す目標である。
先ほど声をあげた騎士も語り聞くレディンに憧れ、魔族討伐を志願したのだった。
一方テュポン戦士団の面々は違う緊張感に満ちていた。
すでに団内ではフェパイスト殺害の出来事が周知の事実であり、その犯人が目の前に現れた勇者レディンだからである。
「一度だけ言う。即刻この場より全員立ち去れ。」
特に低くも無く、脅し掛かった口調でもない、普通の台詞。
だが、その場に居合わせた面々が、首元に刃物を突き付けられた様な悪寒が走る。
そして悪寒から来る脂汗が全身から吹き出していた。
アレスマルス騎士の面々はそれだけで怯えた表情を隠しもせず退散していった。
もとより勇者レディンと渡り合おう等という度胸の据わった人物が居る筈もなく、興味半分でリリスを追いまわしていた幼稚な精神の持ち主だったのだ。
しかし、テュポン戦士団は違った。

各々が武器を握りなおし、臨戦体勢に入り込んでいた。
そんな団員達を制す様に大柄の男がレディンの前に現れた。
「団長！早く号令を！！副団長補佐の仇をうちやしょう！！」
そばに居た頬に刀傷がある男が待ちわびた様に言う。
「・・・・・・」
「うぇっ！？タイマン勝負がしたい？！」
その言葉に戦闘に集中し始めた面々が又もざわめき立つ。
「・・・・・・」
「いや、文句なんてねぇですけど・・・わかりやした。野郎共！団長がこれから一騎撃ちをする！
もし、万が一団長が負けるような事になったら、この一件は手討ちにして俺達ぁここから撤収する！！」
「おおおおおおおおぅ！！！」
刀傷の男の言葉に団員達は雄叫びで答える。
自分達が所属するこの戦士団の団長が負けるわけがない。
勝利を確信しての雄たけびであった。
「・・・この話受けてくれるかい？」
刀傷の男はレディン向き直り、正式に申し込みをする。
「了解した。この一騎撃ち、お受けしよう。」
「へへ、あんたは副団長補佐の仇だが、話の判る男は嫌いじゃねぇ。
団長もそういう所が気に入っちまったのかね・・・」
刀傷の男は苦笑しながらレディンとテュポンを残し、他の団員達と共に二人から距離を置いた。
テュポンは背中に固定してあった巨大な斧を外し、両手で横に構えを取った。
彼の”鋭槍”の二つ名は、得物を差すのではなく、その突破力を差すものであり、彼の相棒は年季の入った、しかししっかりと手入れされている戦斧であった。
それを見たレディンも腰から剣を抜き、正眼に剣を構えた。
そして一騎撃ちは始る。

先制攻撃を仕掛けたのはテュポンだった。
彼は刃の大きさだけで荷車の車輪ほども有る巨大戦斧を軽々と振りまわしている。
レディンもこの重量の戦斧を剣で受け止めることは出来きず、避けるしかなかった。
しかし攻撃を避けながら一撃を当てられるほど余裕も無い。
それは剣戟を出せても、戦斧を盾にすることで防がれ、攻撃の当たらない状態が続いていたからだ。
また、テュポンも素早いレディンに狙いが定まらず、時折来る剣戟を戦斧で受けるという行動しか取れなかった。
しばしの間これらの攻防が繰り返されていた。
と、急に計ったように二人同時に動きを止めた。
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
無言でにらみ合う二人
お互いが埒のあかないやり取りを止め、必殺の一撃を繰り出そうと集中する。
先に動いたのは、又もテュポンだった。
真上に振り上げた戦斧をそのまま力任せに地面に叩き付ける。
まるで爆発したかのような、凄まじい轟音と土砂が巻き上がる。
そしてそれはテュポンの意図通りにレディンへ向かう。
レディンは上段の構えで集中したまま動こうとしない。
土砂が巻き起こるや否や、テュポンは地面に深く沈んだ戦斧を素早く引き抜くと腰の辺りで横に構え、そのまま回転し始めた。
戦斧の重量を利用し、自身を回転の中心、コマの心棒の役割とし、更に加速させ、遠心力の最高潮で投げ放つ。
土砂を目隠しに、高速で戦斧が空気を切り裂きレディンを襲う。
レディンは土砂を避けることも、あえて動く事無く迎え撃つ。
集中力は頂点に達し、上段に構えた剣はレディンの氣が十二分にのった状態である。

レディンは臆することなく、気合一閃、眼で追えぬ程のスピードで剣を袈裟懸に振り下ろした。
剣筋が土砂と混じわると爆散し相克する。
一瞬で視界が良くなり、その後ろから戦斧が空気を唸らせ、すぐ傍まで迫っていた。
しかしレディンの尋常ならざる速さで振り下ろされた剣戟から、一瞬遅れて衝撃波をつくり戦斧を両断する。
遠心力まで殺しきれなかった為、二つに割られながらもそれぞれが回転を続けながらレディンの左右をすり抜けていった。
衝撃波は戦斧を両断した勢いそのまま直線上に居たテュポンを襲った。
見えたのではない、直感で半身をずらしていたテュポンは左腕と左足を切断されていた。
そしてバランスを崩し、その場に崩れ落ちた。
周りで事の終末を見ていた団員達が我に帰りテュポンの元へ駆け寄る。
レディンはその場に倒れたテュポンを見つめる。
テュポンも団員達に応急手当を受けながらもレディンの瞳を見返す。
暫しの沈黙。
団員達の悲痛な話し声と手当てをする作業音だけが流れる。
刀傷の男がレディンとテュポンの間に立つ。
「これで、一騎撃ちを終了する！」
そう団員達に宣言する。
「勝ちはあんただ。自己紹介が遅れちまったが、俺はデュオニス・メガイラ。
この戦士団の副団長だ。残念だが団長のトドメはやらせれねぇ。
宣言通り、大人しくこの場を立去る。見逃してくれねぇ？」
軽くおどけて見えるデュニオスだったが、内心は緊張で手に汗が止まらなかった。
レディンはテュポンとデュニオスを交互に見やると、剣を鞘に収め、

頭を下げ一礼した。
が、すぐさま踵を返し、森の奥へと消えていった。
「ふぃぃ・・・恐いガキだねぇ・・・団長も満足でやしょ？
あんな凄ぇ奴とは中々お目見えできやせんからねぇ。」
テュポンは含み笑うと縋り付く団員達に支えられ、デュニオス達と
共に街へと引き返していった。

imperial command

魔族討伐より実に十数年ぶりに勅命が出される。
その報せは全世界に素早く伝達された。
その経緯を説明しておこう。
フェパイストがレディンの手により殺害された事により、テュポン戦士団はギルドからの依頼を破棄していた。
そのギルドに破棄申請をした際の理由欄にはこう記述されたいた。

―依頼破棄について理由事項―
我々テュポン戦士団はギルドより承った依頼実行中に敵対者と遭遇。
敵対者との戦闘により副団長補佐フェパイストが戦死した。
敵対者とはレディン・クレイオと思われる。
戦闘の目撃者が彼と身体的特徴が一致していると発言。
又、戦闘前の会話において自ら名乗りを挙げてはいないが、
否定は無く、肯定と思われる態度をとっていた。
この事により、我々テュポン戦士団はギルドの依頼を破棄願い、
独自でこの者を追跡、拿捕することを次なる目的とし行動する。

この内容を確認したギルドは、事実確認を急務とし、その連絡は全ての情報屋に伝達された。
そしてそれはある大国の知るところとなった。
ギルドから連絡があったその翌日に、全情報屋を対象としたミネルヴァからの勅命書が配布された。

”豪胆な野鼠”ではヘルメスがわなわなと振るえていた。
正式文章の第一報を目に通したヘルメスは激しく動揺した。
この通達文に署名されてある国名”ミネルヴァ”とは、その膨大な軍事力と優秀な人員、広大で肥沃な土地をもって現在この世界のリ

ーダーシップを取る巨大国家である。
その国の現国王ユピテルが自ら勅命を出したのだ。
ゴーディアンやダィタンスリなどは自由都市郡と呼ばれ、何処の国にも属さない中立地帯である。
しかし、ミネルヴァに逆らうことは出来ない理由があった。
あらゆる商売に必要不可欠な物資の輸出入をミネルヴァ本国および、その属統治区から行っている為である。
ミネルヴァより、貿易禁止の発令を受けることは自由都市群にとって死を宣告されると同意義だ。
レディンは広く自由都市郡の一般市民に慕われていた。
その事は情報屋を営むヘルメスが一番解っていた。
しかし、ミネルヴァより勅命が下された今、彼を弁護する者は、一部のそれも少数の者を除いて居ないだろう。
ミネルヴァは光神への信仰が特別厚い事で有名だ。
幾つも神殿を建設し、崇め祭っている。
そんな彼らの耳にレディンの件が入ってしまった。
彼らは率先してリリスを狩っていた。
神の意志を遂行する為に如何なる尽力も惜しみない。
レディン一人に軍隊の出陣もありえるだろう。
そうなれば、いくらレディンでもどうにもならないだろう。
もはやどうにもならない事態に陥ったことを実感したヘルメスは、勅命書を握り締めただ、その場で立ち尽くすしかなかった。

／勅命通達文　始／

レディン・クレイオは人類及び神々の敵である。
この者は本来、人々を悪鬼羅刹から守護する立場のものでありながら、
神がこの世の災いの元とお告げになられたリリスを庇い、護ってい

るという。
これは世界の秩序への許されざる反逆行為である。
更にこの者は、リリス討伐の任についていた幾人かを自身の手により殺害している。
この者を見つけ次第拘束。又、抵抗する様であれば排除せよ。
この者に情けは不要である。
我々の手で裁きの鉄槌を撃ちこむのだ。

ミネルヴァ国王ユピテル・ミネルヴァ

／通達文　綴／

こうしてレディンの話は全情報屋を介し全世界に知られることになる。
それはレディンがライディンで防衛戦を行っている最中の出来事であった。

Lilith encounters

ティシフォネは目が醒めた。
そこは苔と芝が茂る平地だった。
自分は何時、何処で、何をしていたのか直に状況を確認する。
ティシフォネはレディンに当身を食らい気絶した事を思いだした。
「ちぃっ！」
自覚すると急速に悔しさが溢れ出し、苦々しそうに舌打ちする。
「女だから・・・殺さずってことかい勇者さんよぉ。
あぁあっ！負けた負けた！！
あんだけ色々したのに、負けちまった！
本当に・・・上には上がいて、嫌になっちまうぜ！！
・・・・・・・・しかし、ここは何処だ？」
一通り独白をすませると、気分を入れ替え辺りを見渡す。
すると、自分が気絶した場所ではないことがわかった。
広く円形に開けた空間で、ここだけ少し木漏れ日も射し込んでいて明るい。
中央には焚き火の後があり、直感でレディンの拠点だと推測した。
手足を縛られたり、自由を奪うような事はされていない。
ここは、とても静かな、まるで教会に居るかのような静寂に満ちていた。
この森には現在大勢の追撃者が立ち入ったはずなのに、それらしい声は聞こえてこない。
「・・・全滅したか？ハン、まさかな。」
そう言って自嘲したが、その予想が的中しているだろう事を肌で感じ取るのだった。
「とりあえず、この辛気臭い森からでるとするかね・・・」
ティシフォネは　幾ら筋力を付けても太くならない自分の手足をほぐし、全体の柔軟を始め、五体満足な事を確認する。

「さて・・・と」
動き出そうとしたが、現在の自分の位置がわからない。
「まいったね・・・・・・お？」
何気なく目に入った大木に古い案内板を見つけた。
目立つ大木にコケだらけでは有るが、書いてある文字は読みとれる。
「なになに・・・東直進ゴウライオン平原・・・？」
ゴウライオン高原とはダライガー山脈とライディンの森とに隣接する広い平原であり、
小さな集落が点在し、主要都市への街道も整備されている。
「へぇ、誰だか知らないけど、便利なもん造ってあるんだねぇ。」
案内板には矢印で東の方向を指す絵まで書いてあった。
「ゴウライオンに出りゃ、どうにでもならーね。」
ティシフォネは鼻歌交じりで案内板の示す方向へ歩き出した。
先程の広場から抜けると急に暗くなる。
明るい場所に慣れた目で移動を始めた為である。
それを抜きにしても森の木々が幾重にも重なり覆い茂らせた枝葉が太陽の光りを遮るからだ。
太陽の昇り沈みをみたり、夜空の星などを目印に方向を知る方法がこの森では使えない。
かなり卓越した方向感覚を持った者でないと、先程の案内板の通りの方向を進んでも、木々の合間を縫って進んでいる内に、直進できなくなり、森の中をさ迷う羽目になるだろう。
幸いティシフォネには問題にするほどの事ではないようだ。
木々を避けながらも進むべき方角からずれる事は無い。
しばらく進んでいく内に、何かの気配を察知した。
「・・・誰だ？」
ティシフォネは歩みを止め集中する。
自分の部下や、敵対するグループの者ならば少なからず殺気をはらんだ気配のはずであるが、今知覚している気配の持ち主には殺気がまったく感じられない。

ともすれば小動物と勘違いしてしまいそうになるほどだった。
注意深く相手の気配の位置を感じ取る。
まだかなり距離は離れている様で相手はこちらに気がついていない。
ティシフォネの経験がこの気配は意思有る者・・・つまり人間のものであると判断する。
「畜生じゃあないと思うが・・・変だね、こんな森に殺気も無く入ってる奴なんざぁ・・・・・・」
そこまで言って思案する。
「もしかして、これがリリスなのかぃ？」
思いついて吹き出す。
「ぎゃはは！なんて巡り合わせなんだろうね！この結末を勇者様が知ったらどう思うことかねぇ！！」
ティシフォネは歓喜に満ちた感情を力へと変換し、気配の主の元へと駆け抜けて行った。

Reminiscence

ここ数日、不思議に思う・・・。
何故か追われている気配が感じられない。
もちろん逃げる方向は人の居ない場所を選んでいるつもり。
普段なら捜索能力に長けた者が先行して、私の場所を探し出して後からつれてきた大人数で追い立てまわす。
しかし、その先行者も感じられない・・・。
少し前、このライディンの森に入る少し前からぱったりと追跡者の気配が消えている。
リリスになってから、所在を知られたのに、これほどの日数の間追跡者の気配が無いなんて初めて。
だからだろうか、ある一つの妄想が頭をよぎる。

”あの人が追手を来ない様にしてくれているのでは？”

あの人・・・数日前の晩に傷を手当てし、毛布を掛けてくれた顔も名前も知らない人。
ひとときとはいえ、人の温もりを与えてくれ、自分が人だと思い出させてくれた人。
でも、まさか。
傷の手当てと毛布の施しなら、普通の村娘と間違った人が与えてくれる事も有るかもしれない。
けれど、そういった人ならリリスの追跡者の邪魔をすることはない。
でも、わかる。判ってしまう。
あの人は私がリリスだと知っていて手助けをしてくれている。
そして今も私なんかの為に追手を引き付けてくれている。
もしかしたら裏切り者と蔑まれているかもしれない。
私なんか助けるから・・・

この世の災いの元、人類の敵であるリリスを助けるから・・・
でも、嬉しい。
嬉しくて堪らない。
この世界に、まだ私を助けてくれる人がいるという事がとても嬉しい。
そう想うだけで身体が歓喜に打ち震えてしまうほど。
リリスと宣言されてから幾年かは、何かの間違いだ、こんな娘を殺しても意味が無いと庇ってくれる人はいた。
だけどそれも、十数年と変わらぬ姿で生きている私を見ると変わっていった。
化け物とよばれ、お前はリリスだから、と酷い乱暴を受け、そして殺された。
しかし殺されれば甦って、見つかれば殺された。
途切れる事の無い生滅と蘇生。
終止符を打ちたいが為に自殺だって何度も繰り返した。
でも、駄目だった。
気が付くと五体満足でこの世界の何処かに居るのだから。
化け物と呼ばれたって仕方が無いよ。
何度だって死んでも甦るなんて、人間じゃない。
百年ほど経った頃、やっと私は諦める事ができた。
人間として生きていく事に。
化け物ならば、人に逢わずに生きていこう、そう思った。
そして人の居ない場所へと転々と移動した。
でも、それでも、何処に行っても人間は居る。
初めは居なくても時がたてばやってくる。
あんなに人が死んでいって、この世の終わりだと騒がれていたのに・・・
百数十年もすれば、今度は溢れるほどに増え出した。
人の居る場所の合間を縫って移動と転住を繰り返す日々になっていった。

１度だけ西方大陸へ向かった事もある。
でも、あそこは別世界だった。
死んでも甦るからいいなんてない。
あそこは魔族・・・正真正銘の人間の敵が居る場所。
あれは生き物としてすら別次元のものたちだった。
敵対するものは同属だろうと関係無く破壊し殺戮し尽くす。
面白ければ自分ですらどうなっても構わない。
そんな狂ったものたちの居場所。
そこで凄い力を持った人間達が、悪い魔族を退治していた。
彼らは人間離れした能力を持っていたけど、苦戦を強いられていた。
それでも、西方大陸から魔族を一歩も出さない様に死力を尽くしていた。
生きるもの全て死ぬ。殺し殺される。
そんな見渡す限り死に充ちたあの世界に私は耐えられなかった。
まだ、死ぬのが私だけの”こちらの世界”の方がマシだと思えるほどだったから。
そういえばここ数年”勇者”と呼ばれるほどあの大陸で活躍した人がいるんだっけ。
そんな人に見つかってしまったら、すぐに殺されちゃうんだろうな。
でも・・・あの人なら・・・
勇者と呼ばれる人からでも、助けてくれるのかな・・・
「そんな事あるわけないよね、ふふっ・・・？！」
自分が笑っていたことにビックリする。
あの人を思い浮かべると楽しい、嬉しいそんな年頃の普通の娘のような感情が、まだ私にも残っていたなんて信じられない。
そしてあの人に会いたい衝動が全身を駆け巡る。
お礼を言いたい、何か話をしたい、自分の事を何でも良いから聴いて欲しい。
そんな衝動が身体を来た道へと戻そうとする。
「・・・駄目、だ・・・よ・・・」

それは出来ない。
出来るわけが無い。
リリスと呼ばれる前・・・憧れた人が居た。
同じ村に住む、５つ年上の青年で、村の自警団の一人だった。
誰にでも優しくて、力持ちで、そうやって誉めると照れた顔が同年代の様に幼く見えた。
私も妹みたいに遊んでもらっていた・・・
けど、リリスと呼ばれた後、自警団は私を捕まえた。
そしてその中には彼も居た。
希望を見つけてすがりついた。
だけど、彼らの賛成意見により、私は処刑されることになった。
あの時の絶望感は数百年たった今でも忘れられない。
裏切られ傷つくのは人を信じるから。
言葉に、表情に、態度に誤魔化される。
あたかも本当に心配してくれているように思えても・・・
平気で私を騙す。
だから・・・駄目。
戻ろうとするよりも強固に、今は先に進むのだと、自分の弱さをねじ伏せる。
何時かは会って話してみたい・・・・・・
そんな小さな願いすらを胸に仕舞い込み、私は森の奥深くへと足を進めた。

Searching for the enemy

「あれが・・・リリスだって？」
ティシフォネは気配を絶ち、木の上から少女を見下ろして呟いた。
年の頃は１０代半ばであろうが、しかし年齢にそわない細すぎる身体を辛うじて包んでいる薄汚れたワンピースには、所々鉤裂きがあり、白すぎる肌が露出していた。
幾つかの部位には包帯が巻かれており、しばらく前に傷を負っている事が判る。
傷んでくすんだ山吹色のロングヘアも本来は手入れをすれば美しいブロンドになるのであろう。
少女は少し進むと辺りを見渡し、安全を確認すると、また少し進んでは辺りを見渡すを繰り返していた。
「確かに挙動不審ではあるが・・・」
腕を組んで悩みこむ。
リリスと思しき気配をたどってきて、この少女を発見してから半刻が経とうとしていた。
ティシフォネはずっと少女を観察していた。
手配書に描かれていた特徴とはほぼ一致している。
その手配書も幼少時分から、父親に事あるごとに見せられて暗記している。
この世界に生きるほぼ全ての人間が生まれたときから見て育っているであろう手配書。
大抵の一般人は物心ついた頃には気にもとめなくなる。
ここ百年ほど内容に変更は無く、古くなれば新しいものに張り替えられた。
ティシフォネは父親が賞金稼ぎだった為に、子守唄代わりに自分の夢を聴かせられた。
”リリスを倒して栄誉を手に入れる”

口癖の様に語る父親は、小さな戦士団に所属する平凡な戦士だった。
その父親もティシフォネが物心付いた時には戦場で命を落としていた。
ティシフォネにとってリリスの話は父親の話でもある。
そんな想い出を重ねつつ見る少女は、とても栄誉を貰えるほどの存在とは到底思えなかった。
「やれやれ・・・」
呆れた口調でそう言うと、木の上から少女の側へと飛び降りた。
「きゃっ！？」
少女は突然人が飛び降りて来た事に驚き悲鳴をあげる。
ティシフォネは着地の衝撃を逃す為に折り曲げていた脚をゆっくりと伸ばして立ち上がる。
そして顔を挙げて少女を見ると・・・目の前には居なかった。
「なっ！？」
急いで辺りを探してみると、暫く先に後姿を見つけた。
どうやら即座に逃げ出したらしい。
その判断力はティシフォネも関心するほどだが、逃げ方が下手だった。
足場の良い場所を前もって確認しながら進まず、ただ直線的に進もうとするのが間違いだ。
そんな少女に追いつくのに手間と時間は掛からなかった。
「逃げるって事は・・・当たりかねぇ・・・」
余り気乗りしない台詞を吐き出しながら、少女の後ろを獲る。
「えっ？」
突然の声に振りかえろうとした所をティシフォネの手刀が後頭部へ入る。
一瞬で意識を飛ばされた少女の身体はバランスを保てなくなりその場に倒れた。
「まさか、一発で決まっちまうとは拍子抜けもいいこった・・・
ますます、本当にリリスかどうか疑わしい・・・」

と言ったものの、結局少女をこのままにしておけず、肩に担いでライディンから出ることにした。
身長は低く華奢な見た目通り、身体は軽いものだった。
「何食ってんだコイツ・・・」
今だ疑念は掃えないティシフォネだったが、そのまま東へと向かうのだった。
暫く進んでいると少女が目を覚まそうとしてる事に気が付いた。
そして丁度、計った様に辺りには風が吹く様になり始めていた。
森の出口が近くなってきた為である。
鬱蒼と茂る木々に遮られて、風は森の奥まで届く事が無いからだ。
ティシフォネは少女を近場に降ろし、意識が戻るのを眺めていた。
見るからに普通の娘だった。
「寝顔は可愛いもんだ・・・」
未だ幼さの残る顔立ち、ともすれば大人の女性を感じさせる、少女から大人へと丁度変化する年頃なのだろうとティシフォネは一人納得する。
「自分はこの年頃にゃあ男相手に殴り合いしてたっけかなあ。」
自分の粗暴な過去を思い出し自嘲する。
「ぅ・・・ん・・・」
少女は目を覚ました。
そしてティシフォネを見るなりその場から飛び退いた。
だがしかし、大木に背を阻まれ2メートルも距離は開いていない。
「気が付いた様だね。」
そんな少女を微笑ましく見ている。
「・・・・・・・・・」
だが少女は悪鬼を見るかのごとくティシフォネを睨みつけたいた。
さながら怯える自分を見て愉悦に浸っていると思われているのだろう。
「なんて、あたしゃ悪趣味じゃねーよ。
大丈夫だって、今んところ捕って食おうとは思ってねーよ。」

「・・・・・・・・」
少女は言葉を発しない。怯えた様子も見せない。
目尻に涙を浮かべるも、泣きじゃくったり、取り乱したり・・・そして命乞い等しなかった。
「ふう。ダンマリかい・・・
まあ、その態度で確信できたってもんだがね・・・
見た目がどうであれ、アンタはリリスで間違いないってな。」
「・・・」
「この状況でそういう態度が取れるなんて対した度胸だねぇ。
初めてみたときは信じられなかったが・・・こうやって目の前にすると、
意外と気が抜けないんだねぇ・・・ゾクゾクくるよ。」
ティシフォネは手に浮かんだ汗を拭っていた。
見た目も、殺気も威圧感もレディンに比べれば皆無に等しい。
だが、その蒼い瞳に見つめられるだけで、本能的に驚異的な何かを感じ取ってしまう。
「貴方も私を殺しに来たのですか？」
ずっと黙っていた少女はティシフォネを真正面から見据える。
「っと、いや、あたしは殺さない。ギルドへ連れて行くだけさ。」
一瞬気圧されたが、普段の口調に戻して応えた。
「・・・・・・」
「世間じゃ、アンタを探して大勢の人間が四苦八苦してるのさ。
そのアンタをギルドへ連れて行けば、あたしの株も上がるってもんさ。」
黙して動かぬ少女に一方的に話しかける。
「今だって、この森にギルドの依頼を受けた奴や、興味本位で嗅ぎ付けたガキどもがわんさかだ。」
両手を一杯に広げて見せる。
「でも貴方は一人・・・」
「くっ痛いところついてくれるじゃないか・・・」

ティシフォネは顔をしかめる。
「ああ、ここにきた時はもっといたんだがね・・・
あの忌々しい勇者さまに、みーんなやられちまったのさ！」
「勇者さま？」
ドクンと少女の胸が大きく高鳴った。
「あ？もしかして、アンタの指示じゃない？」
「な、何の事ですか？」
少女は高鳴り始めた鼓動を必死で抑えようと平静を装った。
「ふむ、こりゃ面白いことになってきたねぇ。
じゃあ、アンタは知らないんだ・・・
・・・面白そうだし教えてやろうかね。」
「・・・」
「お、興味有るって顔だね。いいね、話しがいがあって！
今この森にアンタを、リリスを追う者が集まってきてるのはさっきも言ったよな？
実はその追跡者を皆殺しにしてるヤツがいるのさ。
なんとそいつは少し前まで西方大陸で魔族を倒しまくって、皆から”勇者”なんて呼ばれて慕われていたヤツなのさ。」
「！？」
ティシフォネの言葉に少女の胸は弾け飛ばんばかりに鼓動を打った。
まるで耳の鼓膜が心臓に変わって踊っているように感じるほど鼓動の音が全身を支配する。
ティシフォネが渋い表情で何かをぼやいているようだが、少女の耳には届かない。
（”あの人”が、勇者？！）
自分が夢想していたものが現実であった事の衝撃に気を失いそうになる。
「その人は・・・今、何処に・・・」
少女は考えたことが口から出されていた。
「んあ？さーな、まだ森のどこかで惨殺ショーを繰り広げてんのか

もな。」
散々愚痴を溢していたティシフォネが興味なさそうに答える。
「会ってみたいってか？
だが、駄目だ。アンタをつれているところを勇者に見つかりでもしたら、今度こそ命まで奪われちまう。
このまま森を出て、近くの町でギルドに引き渡させて貰うからな・・・って聞いちゃいねぇえ。」
冷酷なキャラを演じきった満足感も得られぬまま、惚け続ける少女・・・
リリスを、やはり”らしく”ないと思いながらも見つめるのだった。

Persuasion

ゴウラィオン高原に隣接する形のライディンの森。
その境目が森の東出入口となる。
そこから数百メートル離れた場所には見渡す限りの兵士の海。
その数１０万を擁する、ミネルヴァ国第二師団だ。
指揮官の所在を示す鳥を模った紋章旗が一際目立つその一角に見知った顔も混じっていた。
ゼスとハウゼスだ。
二人は入り口から少し離れて立つレディンへと一団より離れ、歩み寄ってくる。
「お久しぶりです。レディン。」
ハウゼスにいつもの間延びした喋り方は無く、事務的なものにさえ感じられた。
「ああ・・・久しいな。もう、何十年と会っていない気がする。」
「そうでしょうか？ジーグ村のドラゴンを一緒に倒したのは2年ほど前なのですよ？」
レディンがその言葉に一瞬硬直したが、すぐに平静を取り戻す。
「・・・レディン」
普段喋らぬゼスが一言名前をつぶやく。
重くも無く、勢いもなく、ただ悲しそうに。
それだけでレディンはゼスが何を言いたいのか理解した。
「今の現状が世界のルールから見れば正しくないのは解っている。
しかし、深く知ってしまった。
リリスが元は唯の人間だったということを。リリスはただの少女だということを。
知ってしまった以上、観て観ぬ振りなどできない。
彼女は何もしていないのに、唯生きているだけで迫害される。
他人にその命すら弄ばれているんだ！

それが絶えられないんだ・・・」
自身が吐き出した台詞に悲壮な表情を浮かべるレディン。
「・・・そうですか、予想していた答えだとしても、実際に貴方の口から聞きたくは有りませんでした・・・
私達は貴方に近しい間柄ということで、話しをしている間、後ろのミネルヴァ軍の人達に待って頂いています。」
ハウゼスは一つ大きく息を吸い込んだ。
「レディン、私達と一緒に来ていただけますね？これは最後通告と受け取ってください。
この申し出を断る様であれば、まず、後ろに待機しているミネルヴァ国第二師団が。
仮にこの場を逃げ切れたとしても、その後もミネルヴァ国王ユピテルの名の元に・・・
貴方は生死を問わず、世界中に指名手配されます。
・・・けして悪い待遇にならない様に私達も最善を尽くします。
どうか、このまま・・・抵抗などせずに私達と共に来て下さい。」
「・・・レディン」
悲痛に訴えるゼスとハウゼスを直視できず、顔を背けるレディン。
「・・・・・・それは、出来ない。」
「なぜ・・・なぜですか！貴方が護ってきた世界でしょう・・・
今まで貴方が身を削り、命を掛けて護ってきたものを・・・
なぜ、そう簡単に捨てられるのですか！！」
頑なな態度のレディンに激情をぶつけるハウゼス。
「簡単じゃない！
簡単じゃ・・・ない・・・悩んだ、今も悩みつづけている。
どうしたら良いかなんて、結局答えは見つからない・・・
だけど、今のままリリスが無残に殺されているのを見過ごす訳にも行かない。
頭で幾ら考えても答えが出ないから・・・いまは感情にしたがっている。

俺はただ、彼女を護りたいだけだ！
孤独でもいい、平和に生きていける様にしてやりたいだけなんだ・・・」
「だから、殺すのか？」
ゼスが真摯に語る。
「そう、殺さなければ、追い返すだけじゃ駄目だった。
次から次へと、追う者が入れ替わるだけで常に居場所を捜索され、発見されると逃げ回らなければならない。
彼女は身も心も休まる時などないんだ。
残酷じゃないか・・・人間じゃないなら、化け物なら歯牙にも掛けないのだろう。
しかし、彼女は人間なんだ！疲れれば眠るし、傷を負えば血も流す！
こんなひどい逃亡生活をどれだけ続けてきたというんだ！
どれだけ続ければ終わりは来るんだ・・・・・・」
レディンは知らずに涙を流していた。
「その優しさ・・・変わりませんね。
しかし、友人である貴方をみすみす世界の敵などにはさせません。
力ずくで連行させていただきます！！」
ハウゼスがそう言うや否や、ゼスが鉄槌をレディンへと打ち下ろした。
「くっ」
レディンは後ろに飛び退きそれを避ける。
体勢をを整え、自分の剣を抜いて二人を見据える。
ゼスはレディンへ第二撃を撃ちこむ為こちらに突進してきている。
その後ろではハウゼスが自分の足元に光り輝く幾何学模様で出来た魔方陣を作り上げていた。
レディンはゼスの鉄槌を避けるが、大きさが半端ではない為、回避動作が大きくなる。
ゼスは地面に叩きつけた鉄槌の柄の部分をそのままレディンへ向かって投げつける。

それは地面にめり込んだ頭部を支点に独楽が回るかのように円を描いた。
「ぐあっ」
剣を叩きつけたが勢いを殺せず、咄嗟に腕で防ぐもその衝撃にレディンは吹き飛ばされた。
土煙を上げながら地を滑るレディン。
その停止地点を杖で指すハウゼス。
すでに呪文の準備は整った。
ハウゼスがそれを口にすると突如レディンの倒れている辺りの地面が水の様に波打つ。
その瞬間、石を水面に落とすようにレディンは飲み込まれた。
レディンは水中で、もがくが如く手足を動かすが、上がる事が出来ない。
「レディン・・・大人しくなさってください。
そこは沼と同じです。もがいても余計沈むだけ・・・
溺れ瀕死になり、貴方が気を失った後、蘇生してさしあげます。」
ハウゼスは沈みこんで姿の見えないレディンに問い掛けた。
「・・・」
その声は届き、レディンは沼と言う言葉で冷静さを取り戻した。
「さあ、ミネルヴァの皆さんを召集して・・・
どうしたんですか、ゼス？」
ゼスはレディンの居るであろう場所から目を離さない。
「レディンなら今頃気を失っているでしょう。
あの泥濁結界から逃れるすべは有りませ・・・！？」
突然の爆発音。
と同時に結界が張られていた場所には水柱の様に土砂が吹き上がる。
「な、なんですの？！」
吹き上がリ続ける砂泥を凝視していたゼスが、そこから放たれる危険を察知し、ハウゼスを横に押し出す。
「きゃっ！」

軽く悲鳴を上げて倒れたハウゼスだったが、倒れこむ直前それを目撃した。
たった今ハウゼスが居た空間に白い閃光が走り、一振りの剣が突き刺さっていた。
それは白刃の一撃が振り下ろされていたことを示すモノだった。
「あっ？！ぐ、ぅうう・・・」
ハウゼスは突如襲った痛みに悲鳴を上げる。
目を向けると左腕の肘から先が切断されていた。
音も無く近づいた泥塗れのレディンが地面から剣を抜く。
と同時に、自分に襲いかかろうとしていたゼスと対峙する。
ゼスは巨大な鉄槌を斜め上から容赦無く振り下ろした。
レディンはそれを紙一重で避けると柄の部分に渾身の一撃を与えた。
柄に大きなヒビが一つ入ると、自重に耐え切れず脆くも折れてしまった。
そこは先程の戦闘で、ゼスがレディン目掛けて投げぶつけた場所である。
レディンのあの時の攻撃は、柄に著しい損傷を与えていたのだ。
「はぁっ・・・はぁっ・・・大人しく・・・引いてくれないか？」
レディンは剣を収めた。
レディンは見るからに激しく息切れをしていた。
先程の結界から脱出する際、自らの氣を圧縮、至近距離で爆発、それを推進力に飛び出したのだ。無論自分も無傷ではすまない。
「・・・やはり、貴方の気持ちは変わり有りませんのね。」
「・・・」
ゼスがハウゼスの腕に布を巻いて止血をしている。
「ここまでして見せませんと・・・わざと貴方を逃がしたといわれますから・・・」
ハウゼスは脂汗を流しながらもにこりと微笑む。
「くっ・・・すまないっ！」
苦悶の表情を浮かべながら謝罪の言葉を言ったレディンはその場か

ら立去った。
「貴方・・・これでよかったんですよね・・・」
「・・・」
ゼスは無言で頷く。
ゼスとハウゼスが倒されたことを確認したミネルヴァ軍は進撃を開始した。
二人の横をレディンを追撃するために兵士達が無数に通り抜けていく。
ゼスとハウゼスの二人は、レディンの立去った方向をずっと見つめていた。

ティシフォネと少女・・・リリスはライディンの東出口へと脚を進めていた。
リリスはティシフォネが勇者の話しをしてから、ずっと何か考え込んでいる。
その為か、ティシフォネの指示に従いこうして大人しく出口へ向かっていた。
（なんだか、急に黙り込んで気持ち悪いねぇ。まあ、大人しくいう事聞いてくれりゃいいか。）
そうしてしばらく歩き続けていると、向こうが明るく光っていた。
それは森の出口から射し込む日光の為である。
「やーっとこんな辛気臭い森ともおさらばか。」
ティシフォネが一人ごちながらも、リリスにその場で待てと指示をして、一人森の出口付近から平原が見渡せる場所へとやってきた。
「な、なんだよアレは！？」
見渡す限り平地である平原の一部分が銀色に光っていた。
それはこの森から何人も逃がさない銀の壁。
目を凝らしてみると、その一つ一つが重装備の鎧を身に着けた騎士である事がわかる。
そう、壁と思われるものは数万の軍隊による隊列で出来たものだった。
銀の壁とライディンの森との中間地点、距離的には森から５００ｍも離れていないところに男女の姿があり、そこへ一人の男が近づいていくのが見て取れた。
「ありゃあ勇者さま・・・か？」
歩み寄る人物は先ほど苦汁を飲まされたレディンだと判別がついた。
「後二人は・・・でけぇ奴とちっこい女・・・」
男は物静かで顔の造りの渋さも手伝い三十路とも取れる雰囲気だが、

その２ｍは超える長身と、それをさらに超える大きな鎚を持っている為に重く異様な雰囲気をかもし出していた。
横の男との比較によりさらに小さく見える身長だが、実際も１３５ｃｍしかない女は薄い生地を幾枚も重ねたローブを羽織っている。
その風貌よろしく、木の削り出しに水晶を付けた典型的な魔術師の杖など持っていた。
「でかいトンカチ男と小さい魔術女のコンビ・・・あれ？」
ティシフォネはそのフレーズが脳裏の隅っこに引っかかった。
「たしか、１年ほど前に名が騒がれた二人がそんな感じだったか？」
彼らに符号する人物が関係した出来事が話題になった一件があった。
それは2年ほど前に中規模な小鬼群がボルテス渓谷で暴れているというものから始まった。
速やかにギルドを含め近隣諸国の協力により、この小鬼群の討伐部隊が編成された。
ミネルヴァ国より第三師団の第五小隊、ギルドの依頼により参加した騎士団が、メデュース、エリュアレ、ゴォルグンの３隊。
いずれも一つが３０名近い人数の騎士団である。
そしてそのサポートとして、幾人かの戦士と魔術師達を含む、総勢２５０余名にもなる部隊だっ。
その闘いで名を馳せたのが進撃の鉄槌と、不動の魔女とよばれたゼスとハウゼスだ。
当初は正攻法で殲滅させられるだろうと単純な掃討作戦しか立てなかったが、小鬼の数とその統率された動きに思いのほか手間取り半年にわたる期間を要することになった。
ある程度の数を退治しても、しばらくするとまた数が増えてゆくため、解決するためには一度に何百と群れる小鬼を全て一掃する必要があった。
そのための作戦として、魔術師による大規模な破壊魔法による殲滅作戦が浮上した。

騎士団で一箇所に鬼どもを追い込み、囲いから逃げ出す小鬼は戦士たちに任せる。
簡単な作戦だが、成功の鍵はチームワークとタイミングを取る指揮官の度量によるところが高い。
実際に作戦が実行されたが、数十になる小鬼群が別働隊のような動きをとり、呪文に集中する魔術師達へと襲いかかってきたのだ。
騎士団の囲いを解けば何百という小鬼が一斉に襲い掛かってくる為に騎士団は動く事が出来ない。
また、戦士たちだけでは相手をする数に限界があり、魔術師達への攻撃は免れなかった。
その場所で他の魔術師を護る為に唯一人で壁となっていたのがハウゼスであった。
彼女は他の魔術師と同じく集団で発動させる魔法に集中しながらも、同時に結界魔法を駆使していた。
結界を力任せに突破しようとする小鬼達のプレッシャーに一歩も引かずに耐え忍ぶ。
それを救ったのが立ちふさがる小鬼達を巨大な鉄槌で薙ぎ払い掛けつけたゼスであった。
この二人の活躍により大規模破壊魔法は成功し、小鬼達は殲滅された。
他にも活躍した者達はいたが、二人の活躍が作戦の成功に深く関っていた事は誰もが判っていたのだ。
そしてこの出来事はギルドを通じて大きな話題になっていたのだった。

「おいおい、戦闘開始かよ、うわ、あのトンカチ男無茶苦茶だな！」
そう言ってふいとリリスを見やるティシフォネ。
何時の間にか横に来て食い入る様に戦闘を見つめるリリス。
「へぇ。やっぱり自分の立場をわきまえてるってことかい？」
ティシフォネが意識せず柔らかく問い掛けた。

「？」
「あんたがリリスなら、そのリリスを保護するような行動をする野郎が気になるんだろ？
自分のせいで、人間と敵対してる勇者がどんなやつか知りたいんだろ？」
いつの間にか少し意地悪な感じの話し方になっていた。
「・・・」
「なるほど、自分でも困惑してるって感じだな。」
「はい。私は数百年もの間、ずっと見つかり次第殺され続けてきました。
貴方とこんなふうに話したり、ましてや勇者と呼ばれるような立派な方に・・・
私を護るような行動を取られるなんて、今まで有りませんでした。」
「ま、そうだな。好き好んで世界中を敵に回すなんて誰も考えないさ。
あんたに、リリスに荷担するってのはそういう意味になっちまう。
まあ、慰めにはならんだろうが、あんたの境遇に多少なりとも同情する奴らはいる。
だが、そこまでだ。
自分の知り合いが困っていても我が身を犠牲にしてまで助けるなんて奴が珍しい世の中だ。
それが赤の他人を、それも神様がお告げした災いの元なんて見向きもしねェよ。」
自分の言葉に多少の苛立ちを隠せずに言うティシフォネ。
「そう・・・でしょうね。だからこそ、理解できません。
あの人がそこまでして私の為にしてくれる事が・・・。」
レディンから視線を外すことなく答える。
「あー・・・そりゃたぶん誰にもわかんねぇよ。」
心の底から呆れるティシフォネが視線を戦場に戻した。
「！？」

「なっ、なんだアレ！魔法なのか！？」
鉄槌に飛ばされたレディンの身体は、まるで地面に落ちたように見えた。
「なんだ勇者さまヤラレたのか・・・肩透かしもいい所だな・・・」
「・・・・・・」
自分が負けた相手がアッサリと敗れたことに怒りを通り越し軽蔑すら感じられていた。
リリスはその場面を未だ食い入る様に見つめている。
「まだ、あの人は負けていません。」
確信に満ちた台詞。
「どう見ても勝負あっただろ・・・」
ティシフォネが再度視線を戻すと、そこには水柱ならぬ土砂柱があがっていた。
その後の展開は目にも留まらぬ展開だった。
「な、なんだ？何が起こったのか全然わかんねぇ！」
ティシフォネには土砂から飛び出したレディンがゼスと一騎打ちで勝った事実が判っただけ。
その経緯まではまるで目で追えるものではなかった。
「あの人こちらに向かってきますよ？」
「げっ！？マジかよ！来んなよ、来んなって！！」
ゼスとハウゼスを倒したレディンは、ティシフォネ達を目指すかのように一直線に走ってくる。
その速度は凄まじく、見る見るレディンは距離を詰めてくる。
「と、とりあえずここから離れるぞ！」
そうティシフォネがリリスへと語りかけたとき、突然目の前にレディンが沸いたように現れた。
「こ、このぅっ！？」
「きゃあっ！？」
レディンは一瞬速度を落とすも、二人を両肩に担ぎ上げると再び速度をあげて森の奥へと進んだ。

「すまないが、しばらく大人しくしていてくれれば助かる。」
一言断りを入れる。
「〜〜〜・・・」
ティシフォネは担がれるときの打ち所が悪かったか悶絶していた。
「・・・・・・」
リリスは自分を担ぎ上げ、ひた走るレディンをじっと見つめるのだった。

Human suffering

「やっぱり此処にいたな。」
「何度か戻ってきているようですね。」
焚き火の跡を確認しながら呟く。
クロノスとアプリコットは然したる障害も無く森の中央に辿り着いていた。
「ああ、此処は拠点にしやすく、ほれ、外への案内板もある。」
そういって一本の木を指し示す。
アプリコットの視線の先には”北西ダライガー山脈”と書かれた苔塗れの板が掛けられていた。
「なるほど。こういう事ですか。」
「ああ、便利なもんだろ？普通の奴らは此処まで入り込んでこないからな。
この場所を知っている奴はそういないだろう。」
ライディンの広大で鬱蒼と茂る木々に阻まれた深部には、偶然か確固たる確信がなければ辿り着くことは出来ないだろう。
「それでは・・・森の外を包囲しているミネルヴァ軍もこの場所を知らないのですね？」
「んあ？ミネルヴァだって？」
ここでその名前が出ることに訝しがるクロノス。
「ええ、暫く前から東側より包囲陣を展開中です。その数およそ十万・・・」
「師団級の数じゃねえか！？」
「風の精霊が言うにはレディンを捕まえに来たそうです。そして、そのレディンはこちらに向かっています。」
「そ、そうなのか！？」
「間も無くあちらから来るでしょう。」
そう指差した方向を二人で見つめる。

「確かに、これだけ近づけば俺でも気配を察知できる・・・が、しかしオマケがいるようだ。」
「オマケですか？」
アプリコットが首を傾げる。
「ああ、レディンの他に二人分の気配が一緒に移動してきやがる。弱弱しい気配なんだが、子供か女か、どっちも俺の知らない気配だ・・・。」
「とにかく、レディンが到着するまで暫く待ちましょう。」
「そうだな。」
暫く後、草木を乱暴に掻き分ける音が遠くから近づいてくる。そこに二人は視線を投げかけると丁度二人を肩に抱えたレディンが現れた。
「クロノス？アプリコット！？」
レディンは二人を見つけると少し距離をおいて足を止めた。
「なんだ？俺達が此処に居る事を察知しないほど慌ててたのか？お前らしくないな。まあ、ミネルヴァの大軍に追われてるんならしかたねーか。」
けらけらと子供の様に笑う。
レディンは苦笑いを浮かべるも、直ぐに自分の立場を思い出したのか険しい顔に戻る。
そしてティシフォネを地面に置くと、リリスを両手で優しく下ろした。
「何処に運ばれるかと思っておとなしくしてりゃ随分と扱いが違うじゃないか、此処で会ったがってヤツだ、さっきの借りを返させてもらうとするかね！」
リリスに向かっている為、無防備な背中に襲い掛かる。
レディンは慌てず左足を軸に半円回転する事でティシフォネをかわし、延髄に手刀を叩き込んだ。
ティシフォネはぎゅぅと呻きながらその場で昏倒した。
「あらら、乱暴な勇者さまだなー。でもまあ、さっきの台詞を聞く

ところ、お前の苦手な種類の女ではありそうだな。」
そうは言いながらも別段責めているわけではない口調であった。
「レディン、彼女は・・・誰なのですか？」
アプリコットがレディンのそばに居る少女から目を片時も離さずに質問する。
「・・・・・・」
黙りこむレディン。それを言うか否か迷っているように見える。
「私はリリス。この世界で、そう呼ばれるモノです。」
レディンが口を開くそのまえに少女は自ら名乗りを挙げた。
「あんたが！？」
クロノスは少女の顔に視線が縫い付けられたように離せなかった。
「な・・・あ・・・？」
脳裏に浮かぶは2年前。
あのジーグ村入り口で見つけ、そしてレディンとともに埋葬した。
戦慄が身体を走りぬける。
あの時、確かに見た顔であった。
あの生首とまったく同じ顔をした少女が目の前にいる。
リリスと名乗られたことの衝撃よりも、そこにいるはずの無いモノとの対面に先ほどから体の自由が利かない。
「クロノス・・・彼女がそうなんだ。」
レディンの声で呪縛から解き放たれるように体の自由を取り戻す。
しかし、身体は脱力し、その場で膝をついてしまう。
「クロノス、どうかしましたか？」
アプリコットがクロノスへ駆け寄る。
「な、何でもねぇ・・・そうか、あんたがリリスか・・・」
あまり力の入らない膝に手を置き、地面に押し込むかのように腕の力で立ち上がる。
「・・・」
リリスと名乗る少女は微動だにせずクロノス達を見つめる。
「そうか・・・本物の・・・本当にいたんだな。

間違いや他人の空似で悲劇が繰り返されているだけじゃないんだな。」
クロノスが伏せ目がちに自嘲する。
「ええ、大抵が聞き伝わる事を本物とは認識できません。
こうして目の前にした事で現実の物として認識するのです。」
アプリコットは優しくクロノスに語り掛ける。
そんなクロノスをレディンは悲痛な気持ちで見ていた。
「貴方達はリリスである私を、どうする気なんですか？」
そこへ凛とした声が上げられた。
「どうもしませんよ。」
「え？」
当然どこかへ連行する、この場で嬲り者にする等の言葉が来るものと思っていた。
しかし、返答は意外過ぎるものであり、意表をつかれたリリスは目を丸くする。
「少し、我々とお話をしませんか？」
見ている者が気を抜かれるような満点の笑顔で答えるアプリコットであった。
昏倒したティシフォネを適当な場所へ運び、近場の木根に腰掛けるレディン。
どうしていいか戸惑いながらもレディンから２ｍ程離れた場所にリリスが座る。
そんな二人と向かい合う様にクロノスとアプリコットが座した。
「それでは、暫くの間、お話にお付き合い下さい。と言いましてもこちらの話を聞いているだけでも結構です。
自己紹介がまだでしたね、私はアプリコット。
隣に座っているのはクロノス。
私達二人は貴女の隣に居るレディンを探して此処へ訪れました。
だから貴女をどうこうするつもりはありません。と、述べても貴女は信用して下さらないでしょうね。」

所詮人間の言うことですから・・・とにこやかに笑う。
「俺達がレディンを探していたのは、2年前のある日から何の連絡も無く、コイツが俺達の前から姿を消しちまったからだ。」
クロノスはアプリコットに続けて語り始めた。
「2年前、俺とレディンと他二人でバルディオスのジーグ村の依頼でドラゴンを退治しに行った。その時、村の周辺ではリリスらしい奴が目撃され始めていた。」
リリスの体がピクリと反応した。
「その時の俺達はリリスなんていうお伽話を真剣に取り留めてなかった。
勘違いか見間違い、他人の空似なんかで悲劇が起こっているんだと解釈してた。
だから、村人が山狩りなど行おうが、居なかった、勘違いだったで終わるんだと思っていた。」
苦々しい表情で続けるクロノス。
「だけど、実際悲劇は起きていたんだ。
俺とレディンは他の二人と別れ、拠点の街へ向う途中の酒場でリリス処刑の噂を聞いてジーグ村へ引き返した。
そして村人達に処刑された後、村の入り口で晒された少女の亡骸を見た。」
クロノスはリリスを見て、レディンへ視線を移す。
「俺達は憤慨し、村に無断で亡骸を持ち去って埋葬した。
俺もあの時は村人全員を罵倒し、殴り倒してやりたいくらい気が立っていた。
だがな、あの時のお前は俺以上の激しい怒りと深い悲しみに充ちていたからな。
そんなお前を観てなかったら俺も冷静ではいられなかった。
お前は人間が大好きだったからな。
だから人間が同じ人間を惨たらしく不条理に殺す事に失望感を抱いた・・・

そしてお前はそれから暫くして姿を消した・・・。
その理由は、自分でリリスを見つけ、それを狙う者たちから護る為だったんだな。」
全員の視線がレディンに集まる。
レディンは目を閉じ俯いていた。
その沈黙が全てと言わんばかりに。
「なぜ・・・」
小さな声で問いかけが聞こえた。
「なぜ、リリスである私なんかを!?」
二度目は大きな声で。
リリスは立ち上がり、レディンへと感情をぶつける。
「君は人間じゃないか・・・」
レディンが顔を上げリリスを見据える。
「っ!!」
息を呑むリリス。
「クロノスが言ったとおり、あの時から人間に失望しはじめたんだ。
今まで人間は弱く脆い生物だと思って来た。
だから、魔族とも対等に戦えるこの力を、世の人の為に使うと邁進してきた・・・
だが、その護っていた人間の本性は、どれだけ理不尽で利己的で残虐性に富んだものだったか!
人間を、それも君のような少女を、誰が書いたか知りもしない手配書一枚でどれだけ殺戮してきた事か!
書物などでリリスの事を調べていく内に自分の中の失望感が絶望感へと変わるのにそう時間はかからなかったよ・・・」
「だから私は人間じゃ・・・」
「君は人間だ!」
否定を唱えるリリスの言葉が終える前にレディンが声を被せて打ち消す。
「こんな・・・」

何かを抑えるように拳を握り締め、身体を震わせている。
「こんなに何度殺されても、暫くすれば元通りに蘇る人間がいますか？
世界中に手配書が出回り、見つかれば酷い暴力を受け、助けや命乞いも聞き入れて貰えず、弄り殺される私のどこが人間なんですか！！」
心の内を曝け出す叫びだった。
自分の意識を無視し、勝手に涙が頬を伝うほどの悲痛な激情。
その場の全員が押し黙る。
たとえこの場でどんな言葉を掛けたとしても、過去がどうであろうと、今現在この世界で彼女はリリスなのだ。
「わたっ・・わたし・・・だって・・・普通に・・・うぅ・・・」
心で納得出来ない、認めたくない事実。
どうしても変わらない現実。
今まで独りで堪えて来た感情は堰を切ったように溢れ出す。
「やれやれ、甘えた嬢ちゃんだねぇ・・・」
女性の声と共にパシンと頬を叩く音が響く。
「・・・え？」
リリスは驚いてきょとんとしている。
いつのまにか目を覚ましていたティシフォネがリリスに平手打ちをしたのだ。
レディンもクロノス達もリリスの独白に同情し、ティシフォネが此処まで近づいている事に気がつかなかった。
「甘えてんじゃねぇ！！」
リリスの両肩を掴んだティシフォネが怒声を放つ。
「あんたが、これまでどれだけ酷い仕打ちを受けてきたのか、そんなの誰も解かりゃしねぇさ。
だからって自分は人間じゃない？
犯され殺される人生は人間じゃないだって？！この大馬鹿野郎っ！！
俺だって、こいつらだってギルドの依頼だったからって言い訳並べ

ても、他人を何人も殺してきたりしてんだ！
殺したから殺されたから人間じゃなくなるのか？
そうじゃねぇだろ！
自分で勝手に諦めて、人間捨てた時が本当に人間じゃなくなるって事じゃねぇのか！！」
リリスの肩を掴む手に力が入る。
「生きてる内は何度だってやり直せる機会がゴロゴロころがってんだ。
年とらない、死んでも生き返るなんて身体があるんならそれこそ希望だらけじゃねーか！！」
「希望・・・だらけ？」
涙に濡れる瞳はティシフォネを直視する。
「ああ、今は辛く苦しいだろうが、この先ずっとこのままじゃねーだろう？
考えてみろよ！今居る奴らはあと１００年もしないうちに殆ど死んじまうんだ。
人間なんて少しずつ変化していく・・・此処に居る勇者さまがいい例じゃねーか。
何百年か前と比較してみ？すこしは状況が変わってんじゃねーのか？
だったら希望が持てるだろ？もしかしたらって思えてくるだろ？」
いつしかティシフォネは優しく諭すような口調になっていた。
実際リリスを追い求める人間の趣旨は徐々に変化していた。
リリスが神より定められた当初はそれこそ血眼になって探し出し殺戮されていた。
それは飢饉や疫病により自分の命、家族の命が掛かっている為だから。
だが、近年は動物を狩猟するかのような遊びの面が強くなっていた。
世界中に手配書が回っている状況下で、思いもかけず人とすれ違ってしまった時も、リリスだと気がつかずに通り過ぎられる事も無かったわけではない。

これは昔なら考えられないことだった。怪しきは罰せよという風潮だったことも要因なのだろう。
だとすればリリスを取り巻く環境が緩和されていると言えなくも無い。
言葉は乱暴であるが、ティシフォネの言うことは的を得ていた。
「っ・・・・・・・ぁぁ・・・」
だが、それよりもこれほど暖かい言葉をかけられる事のほうが彼女にとっては衝撃だった。
ティシフォネの言うそれは、己がまだ人間であると認めて貰う事に他ならない。
「ひっ・・・ぅ・・・・・・うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
とうとうその場に泣き崩れてしまう。
こんな自分を心配する人が居る。自分が孤独でない事の喜びが全身をかけめぐる。
数百年抑え、殺し続けてきた想いがあふれ出てくる。
「やれやれ・・・泣く子となんとかにゃあ勝てないねぇ・・・」
ティシフォネはうずくまるリリスを優しく抱きしめながら優しく背中を叩いてやる。
それはまるで泣き愚図る赤ん坊をあやす母親のようであった。
「なんか、あの女に助けられた・・・のかな。」
「ええ、女性とは強いものですよ。」
クロノスとアプリコットが安堵の表情を浮かべる。
そしてレディンも心底嬉しそうにリリスとティシフィネを見守っていた。

Escape plan

「さあて、これからどうするよ？」
「レディンの話では東側はおよそ十万のミネルヴァ軍に抑えられていますからね。
逃げ出すにしても反対方向に進むべきなのでしょうが・・・」
「街へと通じる街道は全面封鎖されているだろう。
だからといって此処に居てもやり過ごせはしない・・・。」
あれから暫くしても一向に泣き止まないリリスをティシフォネに任せ、クロノスとアプリコットはレディンとこれからについて話していた。
「そーだよな。横一列にズラっと兵士を並べて森の中を捜索すれば、迷わずココに辿り着くことも可能なわけだし。」
「だが、ミネルヴァは慎重かつ確実性をも重視する。
闇夜にまぎれて取り逃がさぬよう今晩は森には立ち入らないと思われる。」
「今頃は森の主要出入り口に兵士の配置して猫の子一匹逃がさない検問が張られてるわな。
明るくなる頃には人海戦術であぶり出される・・・って感じだな。」
3人は活路を見出せずに頭を悩ませていた。
少人数とはいえその戦闘能力は逸脱している彼らでも、総勢十万に及ぶ軍隊を相手に出来る訳は無い。
包囲陣を組まれ、体力を徐々に削られて捕縛されるだろう。
「厳しい道のりだがダライガー山脈へ向かうしかねーな。」
「待って下さい。それは先読みされているでしょう。
後で確認すれば判る事ですが、ミネルヴァ軍は均等に兵士を配置していると思われます。」
「なぜそう思う？」
レディンがアプリコットに素直に聞く。

「ミネルヴァ軍が相手にするのは、かつて西方大陸の魔族討伐で侯爵級の魔族を打ち滅ぼしてきた、勇者レディン・クレイオなのですよ？

あの国がその実績を軽んじた策戦など立案する事はありません。」

人間に害なす種族である魔族は独特の社会を形成している。

魔王と呼ばれる強大な力を持つ魔族が頂点とされ、その下に実力ある魔族が終結し、ある種の王国を築いているという。

この王国は特に支配地域を拡大するなどの行動は行わず、西方大陸の奥地で不気味に沈黙を保っている。

それ以外の大多数の魔族は基本的には個人主義で己の欲求に基づいて行動する。

人間に災害をもたらしたければ人間に近づき唆し、同じ魔族でも気に食わなければ闘い、戦闘に無関心ならば人間同様に自己満足のための研究に没頭するなど様々である。

しかし、力ある魔族に取り入り、従属する事を由とするモノもおり、それが繰り返されてゆくと自然と支配階級が生まれる。

そこに君臨する支配者は縄張り意識を持ち始め、それを自己権力の象徴とする。

魔族同士であれ領土拡大などで衝突し、互いに潰しあうことも日常なのだ。

このような魔族を人間側が認識しやすいように貴族階級を元にそれぞれ割り当てられた。

危険度を数値化するならば、絶対君臨者である魔王を１０として以下の様になる。

公爵８：魔王の支配する王国に次ぐ実力、領地を所有する支配者達。現在認識される数は１７。

侯爵７：次期公爵候補とされる支配者達。現在認識される数は１１。

伯爵６：実力と領土が子爵平均を上回ると判断された支配者達。階級の中では最も多い１５２である。

子爵５：男爵よりその実力、領地が著しく顕著である支配者達。現在数１０４だが変動率は高い。
男爵４：主に単独行動を取らず、狭い領地を持つ支配者。現在６３であるが共食する為、最も変動する。
上級３：必要とあれば徒党を組むなど知識が高く力も強い。一般人では撃退できない。無数。
一般２：単独で人間を陥れ破滅させる事を好む。一般人でも装備があればかろうじて撃退可能。無数。
下級１：単独行動を好み、人間に悪意を植え付けるなど悪戯レベルの能力を持つ。無数。

このような階級別けを行い、討伐部隊への実力差目安としている。
ただし、人間が確認しているものだけの話であり、未だ未確認の強大な魔族も存在しているという。
レディンが侯爵級魔族を打ち滅ぼせると云う事は、とても通常の人間が束になっても敵う相手ではないことが理解できる。
だが、侯爵がいくら強いとはいえ魔族討伐は部隊で行い、侯爵単騎対多数というようにお膳立てが行われている状態下での勝利である。
これがレディン個人対軍隊となれば話は別である。
レディンの戦闘能力が壮絶であっても、相手に出来る数など万には満たないだろう。
人海戦術で傾れ込まれたなら、包囲され持久戦に持ち込まれたなら、いずれ疲弊し敗北する。
ましてリリスを連れている現状では、戦闘に入る前に逃亡するほか手段は考えられないのだ。
「ま・・・そうだよな。お前、知名度上げすぎなんだよ。」
クロノスがふてぶてしくレディンに言う。
「そ、それはっ！・・・すまない・・・・・・」
「あらら、素直に謝っちゃってかわいーやつ！」
「ふふふ。」

レディンは二人にからかわれ居心地悪そうに顔をそむける。
「レディン、お前はやっぱダライガー山脈へ行け。」
急にクロノスが真剣な表情で告げると反論しようとしたアプリコットを制して言葉を続けた。
「ダライガー山脈を越えてロナルティンへ逃げろ。
あそこならたとえ師団使っても捜索しきるにゃだいぶ時間も稼げる。」
クロノスの言うロナルティンとは古くから神の住む山とも呼ばれる世界最高峰の山の名前である。
麓には豊かな緑があり、標高があがるにつれ岩肌が多くなり、やがて万年雪が頂上を覆う。その高さは一万mを越すという。
「確かに潜伏場所としては申し分ない、だがしかし、ライディンから離脱できればの話だな。」
レディンも幾つかの逃亡先に挙げた候補にはロナルティンが含まれていた。
だが、問題はここからの脱出方法である。
「それは俺とアプリコットでどうにかしてやるよ。」
「ほう、話を聞かせてもらえますか？」
「まあ、話はいたって単純。明朝ヤツラが動き出す前に俺とアプリコットが囮になる。
ダライガー山脈方面も完全に手薄にはならないだろうが、まあ、お前なら抜けられるくらいの人数にはなるだろう。」
「そうですね、レディンを相手にする場合、大隊単位での移動になると思われます。
百名以下の小隊程度では貴方の足止めにも成らない事を理解しているでしょうから。
そうなると配置される兵の数は多くて五千という所でしょうか。
過半数をひきつける事ができれば、レディン独りで何とかなるかもしれませんね。」
アプリコットが自分の想像を口にして納得する。

「別に闘えって言ってるわけじゃねーぜ？
二千程度なら隠密でやり過ごすこともできるかもしれないだろ？」
「それに私が貴方達の姿を見つけにくいように術をかけることにしましょう。
まったく見えない様には出来ませんが、相手の注意が向き難くはなります。
貴方ならそれで十分なはずです。」
「何勝手に話を進めているんだ！二人とも立場が危うくなるんだぞ、いいのか？何故そんなに助けようとするんだ？」
レディンの発言にきょとんとする二人。
「何を言うか馬鹿者。困っている頼りない友人を助けてやるのはあたりまえだ。」
「クロノス、照れながら言っても説得力はありませんよ。
私達は自分のやりたい事をしているだけです。
貴方と同じようにね。」
「クロノス・・・アプリコット・・・」
決別したはずの人間、それも友人に危険を顧みずこれほどまで力を貸してもらえる。
申し訳なさと感謝の気持ちが胸を熱くする。
「二人とも・・・本当に有り難う・・・」
レディンは涙を流して頭を下げていた。
「レディン・・・頭を上げてください。」
「初めは無理やりにでも連れ戻すつもりだったんだけどな。」
「今、貴方が置かれている状況では、このようにするのが私達の成すべき事なのでしょう。」
「ま、しゃーないだろ。リリスが実在する。しかもあんな可愛い子ちゃんだ。
お前が惚れたってんなら身体張ってでもなんとかしてやらんとな。
はっはっは！」
「な、何を言ってる！そんなつもりじゃ！！」

今にも転げまわりそうに笑うクロノスに慌てて弁明するレディン。
「相変わらずこの手の話は苦手のようですねぇ。」
そんな二人を微笑んで見ているアプリコット。
「えらく楽しげじゃないか。面倒はこっちに押し付けたくせにさ。」
ティシフォネがレディン達の元に近づいてきた。
その横には泣き腫らして目を紅くしたリリスがいる。
「話は大体聞かせてもらったよ。この子もあんた達を少しは信用してもいいみたいだとさ。ほれ、言いたい事があるんだろ？」
ティシフォネがリリスの背を押して一歩前へ進める。
「今までの事を考えると、人間を信じることは出来ません。
でも、私を助ける為にレディンさんがギルドを敵に回している事。
そんなレディンさんを助けようとするクロノスさんとアプリコットさん。
そんな貴方達ならば信じる事ができるかもしれません。」
リリスは胸元の服をぎゅっと握り締める。
「でも、私の為に貴方達が危険な目に会う必要はありません。」
にこりと笑う。
「私が彼らの前に出てゆけば、済む話です。その間に貴方達は逃げてくださ・・・」
「バカなことをいうなっ！！」
大声を上げたのはクロノスだった。
「何の為に俺達が・・・いや、レディンがあんたを護ってると思ってんだ！
あんたに少しでも人間らしく、血生臭いこの生活から抜け出して欲しい為にやってんだよ！！」
「でも、それで死んじゃうかもしれないんですよ？！」
「命惜しさに此処で『はいそうですか』っていうような奴なら、俺がこの場で殺してるさ！！
そんなコイツの命がけの想いをあんたは無駄にしちまうっていうのか！！」

「っ・・・」
リリスは息を呑んで黙り込む。
「私達は自殺志願者ではありません。
皆が生き残り、より良い為にどうすれば実行できるか・・・それを手探りで探している途中なのです。
その為には個人が持てる力を出し切る必要があるのです。
私達は貴女を逃すために・・・そして貴女は生き延びるために、全力を出すのです。」
「でも、私なんかの為に貴方達がしんじゃったら・・・」
「貴女は本当に心優しい人ですね。そのお心遣いは感謝します。
ですが、先ほど貴女も仰ったように、私達を信じてみてはもらえませんか？」
リリスは目に涙を溜め、何を言うべきか迷っていた。
「心配してくれて有り難う。でも、先刻も言ったが君は人間なんだ。
今みたいな酷い生活を強制的に送らせられるのは間違いなんだ。
我々ならそれを少しでも良くできる。
少しでも安心して眠れる夜を。
少しでもおいしい食事を。
少しでも生きることが楽しいと思える事を君に教えてあげたいんだ。」
優しく微笑むレディン。
「あーあー勇者様ともあろう者が、女殺しな顔しちまってさー。
だーから言っただろ？コイツらに言っても無駄なんだよ。」
リリスの頭をがしがしと強く撫でながらティシフォネが口を挟んでくる。
「無駄なんだよ、ム・ダ！
どれだけ気持ちを言葉に替えても、オトコ共にゃあ通じやしねぇよ。
いつも泣くのは女の役回りなんだよ。
まあ、あんたみたいなガキにゃあ少々早い話かもな。」
けらけらと笑うティシフォネ。

「みんな好きでやってんだ。
心配かけて悪いとは思うけど、始まっちまったもんを途中で止めることはできねーんだ。
たとえあんたがミネルヴァへ投降したとしても、レディンの罪は消えねー。
だったら誰も犠牲が無いほうがいいんじゃねーの？」
クロノスがウインクしてみせる。
「皆さん・・・有り難う御座います。こんな私の為に・・・・・・」
リリスは再び泣き崩れてしまった。
その涙は嬉し涙によるもので、誰もそれを止めようとは思わなかった。
そして暫くの時が流れた。
レディン達は逃亡計画の最終的な纏めに掛かっていた。
「じゃ、俺とアプリコットは明朝ダライガー山脈方面より少し西で騒ぎを起す。
まあ、見つかっても『僕たちリリス探索してるものですー』なんて誤魔化しゃいいだろ。」
「私のかける術は精霊の力をかりて貴方達の気配を感じ取りにくくするものです。
多少視界に入った程度では認識外にされる程度です。
目の前に現れたり、大きな音などで気が付かれてからでは効力を失ってしまいます。
細心の注意を払っていてください。」
「あと、俺達は一度街に戻って物資調達をして、ロナルティンへ向かうわ。」
「そうですね、レディンはもう街へ入り買い物も出来ませんからね。」
「すまない、助かる。まだ数日は持つが先は長いからな。」
彼らはこれから隠匿生活を送っていくことになる。
食住はどうにかなるとしても、生活必需品はどうしても街で購入す

るしかない。
しかしそれはレディンにもリリスにも無理な話である。
クロノスたちが物資中継を駆ってでるのは非情に有難いことなのだ。
「ああ、期待してロナルティンで待っててくれな。」
レディンは大きく頷いた。
「話は纏まったようだね、それじゃアタシはここでお暇させてもらうよ。」
ティシフォネは柔軟体操をしながらそう言うと、近くの木の枝へと飛び上がった。
「リリスを見つけてギルドへ・・・なんて思ってたけどさ、実物みたら興冷めしちまったよ。
あんた達みたいな化け物にはついていけないからね。とっととくたばっちまいな！」
ティシフォネはそういい残すと姿を消した。
「なんだよあの女！言いたいこと言って行きやがって、礼の一つも言わせろってんだ！！」
憤慨するクロノスに穏やかな笑みを浮かべるレディンとアプリコット。
リリスはティシフォネの消えた場所を見ながら心の中で感謝を唱えるのであった。
「さあて、明朝出発だし、寝て体力温存といこうや。嬢ちゃんも疲れてるだろ？」
クロノスはそう言うなり、自分で心地いい場所を見つけて横になりながら言う。
「そうですね、貴女も色々あってお疲れでしょう？
私達が交代で見張りをしますから安心して休んでください。
明日からはまた大変疲れることになると思いますから。」
アプリコットがそう申し出ると、リリスは黙ったままだった。
皆が訝しげにリリスを見つめていると、呟くように話し始めた。
「あ、あの、私はリムと言います。」

「え？」
三人は何を言っているのか理解できず思わず聞き返す。
「私の名前・・・です。
私はリリスですが、自分の名前もあります。
できればリムと呼んでくだされば・・・嬉しいです。」
火を噴きそうに顔を赤く染め上げる。
「は、ははは！可愛い名前じゃないか！」
クロノスが可笑しそうに笑う。
「本当に可愛らしい名前ですね。
解かりました。リムさんと呼ばせていただきます。」
「リムか・・・良い名だ。」
レディンもリムが自分達に心を開いてくれている事に素直に嬉しさを感じながらその言葉をかみ締めていた。
「な、なんだか名乗るのも何百年かぶりで恥ずかしいです。
でも、有り難う御座います。
これから皆さんにはご迷惑を御かけすると思いますが、よろしくお願いします！！」
ぺこりと頭を下げるなり少し離れた木の影へ走っていってしまった。
どうやらその木の根元にある洞で寝るつもりらしい。
「律儀で可愛い子じゃないの・・・」
「本当に良い子ですね。」
「ああ、だからこそ・・・」
「だからこそ護ってやりたいだろ？わかってるよ。お前が先に惚れてなかったら俺が惚れてるところだ。」
レディンの言葉を遮るように言うやけらけらと笑うクロノス。
「だから、そうじゃない！！」
少し顔を赤らめながらクロノスに鞘ごと剣を投げつけた。
「ぐあっ！？この野郎・・・・・照れ隠しにしてはえげつない事してくれるじゃねーか！！」
短い悲鳴をあげ、反撃にでるクロノス。

「二人ともまだまだ子供ですねぇ・・・」
そんな二人に呆れ返るアプリコットは既に寝息を立て始めたリムを微笑んで見つめていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1168ba/

リリス　-戒-

2012年1月9日01時50分発行